

楚辭「將矣梯滑積、如脂如膏、以深極乎」韓愈詩「行行正直慎一」
 【脂膏】^シ生物のあぶら。爾雅、釋鳥、注「俗謂之青雀、黃曲食肉、好益」
 【脂膠】^シあぶらと、にかはと。周邦彥、汴都賦「金角丹漆、一竹木」
 【脂糖】^シ車のくさびにあぶらさす。將に出で行かんとする用意。左、襄三「巾車一」
 【脂車】^シ車(部首七畫)の條を見よ。
 【脂肪】^シ皮膚にありて脂肪を分泌する腺。脂肪腺・皮脂腺。
 【脂肪】^シあぶらさきてつやあり。列子「膚色一」○化粧用のあぶら。李嶠謝賜二口脂表「造六宮之一」
 【脂肪】^シあぶらあか。朱德潤詩「日光射波一浮」
 【脂肪】^シ支那に同じ(譯名義集)
 【脂肪】^シ動物の皮下及び筋肉の組織中に在るあぶら。それを分泌する腺を「一腺」といふ。
 【脂肪】^シと、おしろと。史、佞幸傳「傳一」
 【脂肪】^シ地名。誠齋雜記「吳故宮有香水溪、乃西施浴處、人呼爲一」
 【脂肪】^シべにおしろいの氣、柔弱にして豪爽の氣の乏しきにい

ふ。摺盡新語、林邦翰論詩云、梨花一枝春帶雨、句雖佳、不冠有「脂」
 【脂麻】^シごまの異名、以て油を製するが故。本草「胡麻一名一」
 【脂麻】^シ氷「アツツ」^シ勞して功なきに喩ふ。鹽鐵論「内無其質、而外學其文、若「脂麻」^シ氷、費日損功」
 【脂】^シきりにく、きりみ(切肉)「大」
 【脂】^シきり肉のあつもの。詩、魯頌「毛魚一」
 【脂】^シ○ただらかす(爛)○十分に煮る(煮熟)左、宣「二宰夫一熊蹯不熟」
 【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

○肉部 (六畫) 脂・脂・脂・脂・脂・脂・脂・脂

○肉部 (六畫) 脂・脂・脂・脂・脂・脂・脂・脂

○肉部 (六畫) 脂・脂・脂・脂・脂・脂・脂・脂

○肉部 (六畫) 脂・脂・脂・脂・脂・脂・脂・脂

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

【脆】^シ○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし(弱)○かろし(輕)○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」
 【脆】^シ「脆核」^シやはらかなるさね。葛長庚詩「一虛中未有仁」

○はだをぬぐ、省きて、胆に作る。胆。○一中は心臓の下にある高膜。○なまぐさし、羊の臭氣。○轉じて惡の義。列、周穆王「王之嬖御、惡而不可親」

膽

○きも、六腑の一、肝臓の右に在りて、消化液の汁を分泌する器官。○きもだま、決断力、勇氣の出づる所「力」勇「大」○ころ(心衷)「心」忠「○拭ひ治む、ふきとる。内則「桃日」之「桃」の毛をぬぐひとる。○龍「花」草の名、秋日、紫又は白色の花開く。

【養膽】氣力をうばはる。梁武帝「武夫喪膽、義夫一」【養膽】苦を忍び仇を報いんとするに「史、越世家」嘗膽(三ノ目)を見よ。【被胆】髪をよそふ、大いに驚き怖れる。漢書、賈誼傳「大略侯之有異心者、一而不取謀、膽寒參看。【膽氣】物に感ぜざる氣力。五代史、羅光輝傳「獨備有胆」【胆寒】甚だしく驚き懼れる。宋

臍

はれもの、しもつ(腫)【臍腫】はれもの、てきもの。集韻「肉起也」○轉じて、木などのふしこぶ。莊、逍遙遊「吾有大樹、人謂之樗、其大本一而中三、繩墨不可取、斲者棄之、無用者」

臍

○むね(背)中庸「得一善則拳拳服膺而弗失之矣」○あた(常)うける(受)引き受ける。書、武成「誕天命、以撫方夏」○うまのはら(馬)帯○ちかづく(親)○うつ(擊)征伐する。孟、滕文公「戎狄是」【臍受】あたりつける。書經「惟予一人、一多福」【臍選】えらびにあたる。晉書、穆章何皇后傳「以三名家一、立爲皇后」【臍懲】夷狄をうちこらす。詩、魯頌「戎狄是膺、荆舒是懲」

臍

一種のはれもの、よう。史、倉公傳「後五日當一」

史、韓琦與范仲淹、在兵間最久、名重一時、朝廷倚以爲重、天下稱爲韓范、遂入諫曰、軍中有二韓、四威聞之心、一、軍中有二范、四威聞之、驚破膽

臍

【臍如升】臍のきも、大いなる形容。南史、侯景傳「折心腹、破出肝腸、見其臍、乃如升焉」【臍大小心】臍のきもは、大いにして、心を用ふることは細密にする。唐書、羅選傳「孫思邈曰、臍欲大而心欲小、智欲圓而行欲方」【臍智】臍力と才智と。後漢書、度尚傳「鄉邦稱其」【臍神】臍のきもがふる、ももがふる、非常におそれる。形【臍如斗】臍のきも、大いなる形容。三國志、姜維傳「注、維死時見臍、形如斗」【臍如大】臍に於て分泌せし臍汁をためる。【臍藥】藥品の名。硫酸銅。【臍疽】長頸大腹にして懸けたる臍の形に似たるか。陳傳良、水仙花詩「翠花實一、吾今得吾」

【臍】臍(肉部十五畫)の俗字。【臍】クン【臍】セイ【臍】サイ

臍

○へそ、ほど、ほどの緒のとれたるあとにて、腹の中央に在り、古、齊に作る。○果物や瓜のへた(蒂)「瓜」○すべ、へその状に似たるもの。礎、磨、石、うすのへそ。○臍納、海狗の腎。【臍帶】へそを、胎兒の臍と母體とを結びつける膠質の白き肉管。【固臍】固決心をする。覺悟をする。【臍臍】へそをかむ。及ぶべからざる。左、莊六、若不早圖、後君噬齊、齊は臍。

臍

○かひな、ひち(上臂)肩より肘に至る間。○ひちの節。○に(煮)枚乗、七發「熊蹯之」

臍

【臍】一種のはれもの、よう。史、倉公傳「後五日當一」

【臍大於身】臍のきも、大いなる形容。唐書、巨鯨三其體、乃大於身、鼻息所衝、上拂雲漢

臍

【臍力】臍のきも、大いにして、心を用ふることは細密にする。唐書、羅選傳「孫思邈曰、臍欲大而心欲小、智欲圓而行欲方」【臍智】臍力と才智と。後漢書、度尚傳「鄉邦稱其」【臍神】臍のきもがふる、ももがふる、非常におそれる。形【臍如斗】臍のきも、大いなる形容。三國志、姜維傳「注、維死時見臍、形如斗」【臍如大】臍に於て分泌せし臍汁をためる。【臍藥】藥品の名。硫酸銅。【臍疽】長頸大腹にして懸けたる臍の形に似たるか。陳傳良、水仙花詩「翠花實一、吾今得吾」

【臍】臍(肉部十五畫)の俗字。【臍】クン【臍】セイ【臍】サイ

臍

ただる(熱爛)臍。○臍(臍)【臍】かひなのはね。【臍】交たる小羊のにく。徐幹文「蒸豚」

臍

○ひざがしらのほね、ひざのさ(膝蓋骨)膝。○はぎのほね(脛骨)○あしきる刑、古、脛の骨を割断する刑罰。【臍脚】あしをきる刑。又、其の刑に處せられる。司馬遷、報任安書「孫子、兵法修列」【臍】重き物をもちあげて、脛の骨をたぢきる。史、秦紀「王與孟說、舉鼎」

臍

○冬至の後、第三の戌の日に百神を合せまつる。又、其の祭「祭」蜡祭。○祭は年末に行ふ、故に陰曆十二月の異名

○しり、るしき、るさらひ、臍は尻のあな。○物のそこ(底)【臍】臍(前條)に同じ。

臍

○ひち、肘より腕に至る間、手の上部。○髻の柄。○半、袖を半分短くしたる衣服。【臍】ひちと、雨かたの間と。南史、戴顓傳「宋世子鑄、丈六銅像于瓦官寺、既成、面恨、度、工人不、改、乃迎、顧看之、顓曰、非三面、乃一屈耳」【臍】うでわ。通俗文、「一」之訓「手」【臍使】ひちの指を使ふ如く、意の如く人を使ふ。漢書、賈誼傳「令海内之勢、如一身之使、臂之使、指、莫不制」【臍】ひちのまき。【臍】ひちをとりあふ、親み愛するさま。後漢書、陸機「一」【臍】勇氣を鼓する状。孟、盡心、湯、下車、一【臍】ひちにきさむ、固く約束する。列、湯問「一」【臍使指】ひちの指、何事もすて、意の如くなるに喩ふ。臂使を見よ。

【臍】臍(肉部十五畫)の俗字。【臍】クン【臍】セイ【臍】サイ

臍

とす「一月、第一」とし(年)○俗の得度以後の年数を数ふるにいふ。太平廣記「我生五十七、七十八、三十一、三十一は僧となりし年数。○もろは(兩刃)○眞、は南蠻の國名。○丁、は古代、意大利、羅馬附近の民族の稱。拉丁。

臍

【臍】臍(肉部十五畫)の古字。【臍】ハク【臍】ボク【臍】ラフ、ロフ【臍】俗字

臍

【臍】からうめ、なんきん、梅、木の一、冬の末に淡黄色の花開く、臘月に開きて梅花の香あり、故に名づく。臘梅。【臍八朔】臘祭の日たるか。天中記、宋時東京十二月朔日、都城諸大寺、燈七、賣五。

○肉部 (十五十九畫)

【臘】ハシラ 陰曆十二月の半ば。耶律楚材詩「西得臘瓜過」一。【臘】ハシラ 年未張船山、梅花詩「春頭放三枝」字解參看。

十六畫

【膳】エン 先 もと燕に作る。○のど、のんど(咽喉)○脂ハベに、化粧用の紅色の顔料古は丹に脂をまぜて作る。【膳脂虎】ハシラベにつけたら、俾婦をいふ(清異録)【膳井】ハシラ 景陽井の異名、臺城の内に在り、陳後主、張麗華、孔貴嫔と共に其の中に投じて隋兵を避けしところ、開元石版あり、帛を以て之を拭くは膳脂の痕を見らといふ。一名は辱井(南漢志)

【臑】

○肉のあつもの「臑」○いぶす、ふす(燻)【臑目】ハシラ 馬糞にてふすべて目くらにする。史、刺客傳「臑其目」使、臑、築

○臣部 臣 (二十一畫)

○ならぶ、つらぬ(陳)つらなる「一列」史、六國表「一列於郊」【〇ついつ(紋)〇つたふ】上の語を下に傳へる「一傳」〇かは(皮)はだへ(膚)【臚言】ハシラ 世上にいひつたる言。晉語「臚言」於市【臚句】ハシラ 通譯官、上の語を下に傳ふるを臚下の語を上告るを句といふ。史、叔孫通傳「大行設九賓一傳」【臚唱】ハシラ 殿上にて名を唱へて呼び入れる。方回詩「一會叨殿上傳」【臚情】ハシラ 陳情に同じ。張衡賦「即岐趾而一臚は陳」【臚陳】ハシラ つらぬ、陳列する。【臚傳】ハシラ 上の語を傳へ告げる。莊子「大臚一曰、東方作矣」〇殿上にて名を唱へよ(夢溪筆談)【臚唱】ハシラ 殿上にて名を唱へよ(夢溪筆談)【臚列】ハシラ 陳列する。張衡賦「九賓重臚」〇陳列・羅列。

十七畫

【臍】ハシラ 又、裸に作る。○はだが(裸體)〇はだをぬぐ(袒)はだかになる。左、昭三「童子一而轉以歌」〇一物は浅毛の獸、虎豹の屬。周禮、地官「其動物宜一物」〇臍のに通

十八畫

【臑】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

○臣部 臣 (二十一畫)

【臑】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

十九畫

【臑】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

二十畫

【臑】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

臣部

【臑】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

臣部

【臑】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

臣部

【臑】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

○臣部 臣 (二十一畫)

【臣心如水】ハシラ 心の清白なるに喩ふ。漢書、鄭崇傳「臣門如市、願得三考覆」【臣御】ハシラ けらいと、そばめと。國語「男女服爲一」〇臣妾。【臣子】ハシラ けらいたるものと子たるものと。又單にけらいの義とす。【胡銜、上高宗、封事】〇臣服。【臣從】ハシラ 臣服に同じ。【臣庶】ハシラ 一國の臣民。書經「惟茲一一臣下」【臣籍】ハシラ けらいたる分限。〇國皇族以外の臣民たる身分。【臣妾】ハシラ けらいと、そばめと。史、吳太伯世家「行、成、請、委、國、爲、一一一」【臣屬】ハシラ 〇けらいとなりて従ふ。〇臣從。〇けらい。【臣道】ハシラ けらいたるの本分。孟、離婁、欲爲臣、臣、一一一。【致、爲、臣、孟、孫、丑、孟子、而、歸、而、致、仕、乞、骸骨。】【臣一主】ハシラ 臣として仕ふる身は一なるも、君として事ふべき人は數多ある。左傳、諺曰、「吾豈無一主」【臣服】ハシラ けらいとなりてしたがふ。漢書、地理志「樓、會稽、一一一」〇臣從。【臣儀】ハシラ けらい、めしつかひ、禮。

二十畫

【臍】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

二十一畫

【臍】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

二十畫

【臍】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

二十一畫

【臍】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

二十二畫

【臍】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

二十畫

【臍】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

二十一畫

【臍】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

二十二畫

【臍】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

二十畫

【臍】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

二十一畫

【臍】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

二十二畫

【臍】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

二十畫

【臍】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

二十一畫

【臍】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

二十二畫

【臍】ハシラ 〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。〇瓜一は括樓ハシラ。

林類案、看經門、南堂靜云、須彌山、不見、大海水深、不見、底、不揚、塵、無、處、同、項、播、著、自、家、底。

【自我】の哲學にて、意識する我といふ觀念。
【自艾】みづから悪を去りて善を修める。艾は刈り除く。孟萬章、太甲悔過、自怨一。

【自解】みづから強ひていひわけする。關尹子、世之愚拙者、去授聖人之愚拙一、殊不知聖人時愚時明、時拙時巧、韓愈、與陳給事書、急於一謝、謝一自流。

【自害】みづから死する。大藏昆婆娑論、以刀一而死、自殺、自盡、自戕。

【自好】自ら身を潔くする。孟萬章、鄉黨一者不爲一自愛。

【自家】みづからいたす。己の誠をつくす。漢書、蘇武傳、兄弟親近常願三肝腸墮、地、今得一殺身一、蘇武傳、斧鉞湯鑊、誠甘榮之、自効。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【自覺】○心理學にて自分を知覺する作用。○自意識。○自分の地位又價值を意識する。

【自我作古】みづから古の禮に拘泥せざる義。宋史、禮志、孝宗欲

不用易、月之體、曰一、何害一。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【自如】平氣なる貌、物事に動ぜざる貌。漢書、李廣傳、史士無二人色、而廣意氣一自若。

【自序】己の著書に自ら作りたるはしがき。史記に「太史公一あり。

【自助】○他人の力を頼まず、みづから己をたすけて事を成す。○自分の助とする。新語、人君莫不、求知賢一、近賢以自輔。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【自】みづからなづく。北史、李涪傳、涪弟、尋常、遠遊、放逸、一、居、蕭然、有、絕塵之意。

【舟】シウ ① 舟 (船) 孤「歸」輕「輕」
 「盛」釣「漁」歸「歸」易
 繫辭「剡木爲舟、剡木爲楫、舟楫之利、以濟不通」○おぶ (帶) 詩「大雅、何以之、惟玉及珞」○圖「水、湯、酒などを入れる桶。槽」

舟部

【舟】シウ ② 舟 (船) 孤「歸」輕「輕」
 「盛」釣「漁」歸「歸」易
 繫辭「剡木爲舟、剡木爲楫、舟楫之利、以濟不通」○おぶ (帶) 詩「大雅、何以之、惟玉及珞」○圖「水、湯、酒などを入れる桶。槽」

【舟】シウ ③ 舟 (船) 孤「歸」輕「輕」
 「盛」釣「漁」歸「歸」易
 繫辭「剡木爲舟、剡木爲楫、舟楫之利、以濟不通」○おぶ (帶) 詩「大雅、何以之、惟玉及珞」○圖「水、湯、酒などを入れる桶。槽」

【舟】シウ ④ 舟 (船) 孤「歸」輕「輕」
 「盛」釣「漁」歸「歸」易
 繫辭「剡木爲舟、剡木爲楫、舟楫之利、以濟不通」○おぶ (帶) 詩「大雅、何以之、惟玉及珞」○圖「水、湯、酒などを入れる桶。槽」

【舟】シウ ⑤ 舟 (船) 孤「歸」輕「輕」
 「盛」釣「漁」歸「歸」易
 繫辭「剡木爲舟、剡木爲楫、舟楫之利、以濟不通」○おぶ (帶) 詩「大雅、何以之、惟玉及珞」○圖「水、湯、酒などを入れる桶。槽」

【航】カ ① 航 (船) 別名「輕」
 「津」野「野」左思賦「汎舟」於彭蠡「○もやひぶね(方舟)兩舟並び行くもの。張衡、思玄賦「浮橋」河而無「○ふなばし(浮橋)「浮」北史「守朱雀」○わたる(渡)舟にて水を渡る「一海」北史「一葦而可」航に通す。詩「衛風「一葦杭之」

航

【航】カ ② 航 (船) 別名「輕」
 「津」野「野」左思賦「汎舟」於彭蠡「○もやひぶね(方舟)兩舟並び行くもの。張衡、思玄賦「浮橋」河而無「○ふなばし(浮橋)「浮」北史「守朱雀」○わたる(渡)舟にて水を渡る「一海」北史「一葦而可」航に通す。詩「衛風「一葦杭之」

【航】カ ③ 航 (船) 別名「輕」
 「津」野「野」左思賦「汎舟」於彭蠡「○もやひぶね(方舟)兩舟並び行くもの。張衡、思玄賦「浮橋」河而無「○ふなばし(浮橋)「浮」北史「守朱雀」○わたる(渡)舟にて水を渡る「一海」北史「一葦而可」航に通す。詩「衛風「一葦杭之」

【航】カ ④ 航 (船) 別名「輕」
 「津」野「野」左思賦「汎舟」於彭蠡「○もやひぶね(方舟)兩舟並び行くもの。張衡、思玄賦「浮橋」河而無「○ふなばし(浮橋)「浮」北史「守朱雀」○わたる(渡)舟にて水を渡る「一海」北史「一葦而可」航に通す。詩「衛風「一葦杭之」

【航】カ ⑤ 航 (船) 別名「輕」
 「津」野「野」左思賦「汎舟」於彭蠡「○もやひぶね(方舟)兩舟並び行くもの。張衡、思玄賦「浮橋」河而無「○ふなばし(浮橋)「浮」北史「守朱雀」○わたる(渡)舟にて水を渡る「一海」北史「一葦而可」航に通す。詩「衛風「一葦杭之」

舩

ふなばた、ふなべり、船の兩邊
 船一 船一
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩

舩

ふね、支那の關東にては舟、關
 西にては「酒」客「釣」賈
 「戦」酒「客」釣「賈」
 船員、船長をはじめ、すべての船
 船乗組員。
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩

舩

「命造」一〇上甲板の前面に一
 段高くしたる處。
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩

舩

舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩

舩

おほぶね。
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩

舩

おほぶね、海中の大船「海」
 「蕃」「蠻」「大」「商」「賈」
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩

舩

おほぶね、狹く長き小舟「小」
 「釣」「水雷」「漕航」
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩

舩

おほぶね、抱朴子、博喻
 「一」鶴首、涉川之良器也
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩

舩

葉志、上下置、隔啓閉、以通三黃汁二
 河一
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩

舩

花(木部五畫)に同じ。
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩

舩

おほぶね、海中の大船「海」
 「蕃」「蠻」「大」「商」「賈」
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩

舩

おほぶね、狹く長き小舟「小」
 「釣」「水雷」「漕航」
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩
 【舩】 舩 舩 舩
 舩 舩 舩

【芋】

○いも、さといも(爵鳩)「緑」
「紫」野「水」大いなり。詩、小雅「君子攸」
「芋栗」かしら、後漢書、馬融傳「芋魁芋頭」
「芋魁」芋の根、かしら、後漢書、馬融傳「芋魁芋頭」
「芋魁」芋の根、かしら、後漢書、馬融傳「芋魁芋頭」

【苽】

○おこる(勃)さかんなり。○
「欲」は林の木、ふるひうく(鼓動)こる。
「苽然」おこる貌。司馬相如、上林賦「苽然」
「苽然」おこる貌。司馬相如、上林賦「苽然」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【苽】

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維」
「白」

【花竹】はなと、竹と。蘇軾、樂園詩「一秀而野」
 【花軸】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花莖】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花莖】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花中君子】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花中君子】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花中君子】はなを著くる莖、花梗の莖。

【花朝】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花朝】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花朝】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花朝】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花朝】はなを著くる莖、花梗の莖。

【花朝】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花朝】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花朝】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花朝】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花朝】はなを著くる莖、花梗の莖。

【花朝】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花朝】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花朝】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花朝】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花朝】はなを著くる莖、花梗の莖。

志「一性堅、紫赤色似棠梨」
 【花王】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花王】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花王】はなを著くる莖、花梗の莖。

【花王】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花王】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花王】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花王】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花王】はなを著くる莖、花梗の莖。

【花王】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花王】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花王】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花王】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花王】はなを著くる莖、花梗の莖。

【花王】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花王】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花王】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花王】はなを著くる莖、花梗の莖。
 【花王】はなを著くる莖、花梗の莖。

【芝】字紫芝質厚少三葉師房瑯母見三德秀歎息曰見三紫芝師字使二人名利之心都盡二紫芝

【苻】れいしと蘭草と一説に芝は正の誤家語六本「蘭草」と一説に居如入ニ一之室久而不開其香與之俱化矣一辨じて善人才子に喩ふ【晉書謝安傳】

【苳】芝蘭生於深林【詩】君子之進德也處乎高下而不比也【詩】君子之居也下而不怨也【詩】君子之德也下而不怨也【詩】君子之德也下而不怨也

【苳】よろびぐさ、水に生ずる一種の香草、夏時淡黄色の花を著け根は薬用とす。范仲淹、岳陽樓記「岸汀蘭」白芷澤芬。

【苳】シツ【圖】ほそる、蘭の一種、葉細長く三四尺に至る、編みて席を造

り、又葉心の髓を燈心に用ふ、とうしんぐさ(燈心草)

【芻】シウ【圖】○まぐさを與へて飼ふ。○くさかり、草を刈る人。○蒐者(○わら)○まこも。○草を食ふ動物、牛馬羊の類。○艾は芻語の俗。

【芻】芻藁(粟)を運載し糧食を轉送する。漢書嚴安傳使蒙恬將兵以攻三強胡、辟地遺渠、成于北河。以隨其後。芻象は穀を食ふ畜類、牛羊の屬。孟、告子、理之悦、我心猶三之一之悦、我口。

【芻】賤者の言。唐書李絳傳「不、廢、一、則、端、士、賢、臣、必、當、自、効、」

【芻】わらを結びてつくられたる、祭に用ひ、祭終れば之を棄つ、故に用あれば用ひ、用なければ棄つに喩ふ。老子「聖人不仁、以百姓為芻」。【芻】わらと、たききと。禮記「米三十車、禾三十車、一、倍、禾、皆、陳、于、外、」

【芻】まぐさと、豆と。魏書盧昶傳「甘彼一、以母君父一乎」

【芻】芻藁(粟)を運載し糧食を轉送する。漢書嚴安傳使蒙恬將兵以攻三強胡、辟地遺渠、成于北河。以隨其後。芻象は穀を食ふ畜類、牛羊の屬。孟、告子、理之悦、我心猶三之一之悦、我口。

【芻】まぐさと、豆と。魏書盧昶傳「甘彼一、以母君父一乎」

【芻】まぐさと、豆と。魏書盧昶傳「甘彼一、以母君父一乎」

【芻】まぐさと、豆と。魏書盧昶傳「甘彼一、以母君父一乎」

【苳】木、注、其葉一短小

○みくり(三稜草)○からむし。○苳(樹)又、其の實、どんぐり。莊、齊物「狙公賦」一、杼。○一粟は小粟。

【苳】木の始めて生ずる貌。○おろか、無知の貌。莊、齊物「聖人愚一」

【芭】一蕉はばせ。○はな、葩に通ず。【芭】熱地に生ずる植物の、高さ十數尺、葉ははらかにして草の如く、葉は長大にして茎頂にむらがり生ず、葉の纖維をつむぎ、芭蕉布を織る。南方草木狀「甘蔗一名一、或曰芭蕉、葉解散如餅、可紡織為一編、名一蕉葛、張說詩「戲問一葉何愁心不開」甘蕉、芭蕉。

【芳】かをり、にほひ、草のよきにほひ。引伸してひろく物のよ

【芳】香をいふ。儀禮「嘉薦令」○かんばし、かをる。○にほひよき草(香草)○ほまれ「一名」聲譽の美くしきをいふ。晉書「流一後世」○賢者、能士。○他人の事物を敬していふ「志」一「壘」一「輪」

【芳】かをり、にほひ、草のよきにほひ。引伸してひろく物のよ

【芳】かをり、にほひ、草のよきにほひ。引伸してひろく物のよ

【芳】かをり、にほひ、草のよきにほひ。引伸してひろく物のよ

【芳】かをり、にほひ、草のよきにほひ。引伸してひろく物のよ

【芳】かをり、にほひ、草のよきにほひ。引伸してひろく物のよ

【芳】かをり、にほひ、草のよきにほひ。引伸してひろく物のよ

【芳】かをり、にほひ、草のよきにほひ。引伸してひろく物のよ

【芳】かをり、にほひ、草のよきにほひ。引伸してひろく物のよ

【芳】かをり、にほひ、草のよきにほひ。引伸してひろく物のよ

【芳】かをり、にほひ、草のよきにほひ。引伸してひろく物のよ

【芳】かをり、にほひ、草のよきにほひ。引伸してひろく物のよ

【芳】かをり、にほひ、草のよきにほひ。引伸してひろく物のよ

【芳】かをり、にほひ、草のよきにほひ。引伸してひろく物のよ

【芳】かをり、にほひ、草のよきにほひ。引伸してひろく物のよ

【芳】かをり、にほひ、草のよきにほひ。引伸してひろく物のよ

【芡】^シ 九齡時、亂雲堆裏結三三、已共二紅塵、迷漸疎、^シ 芡。【芡鹿門】^シ 芡坤を見よ。

【芡】^シ 〇ぬなは、じゅんさい(蕒菜)

水草の一、莖は細長く、葉は楕圓形、水上に浮ぶ嫩芽を食用とす。詩、魯頌、薄采其「^シ」芡葵。〇かや、^シ 芡。

【芡】^シ 〇ハツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

〇はち(蓬)禮、檀弓、「^シ」則冠而

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

む、羽之を用ふることを終へず、増、憤りて仕を辭し、疽背に發して死す、蘇軾に范增論あり、文章軌範に出づ。

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

は印度の草の名、柔かにして風の吹くままになびく、因りて物に拘らざる出家に比す。釋氏要覽、「^シ」芡西天草名、具五德、故將喻「^シ」芡人。

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

〇なへ、禾の初生のもの。又、

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【芡】^シ 〇ハツ 通音マツ

【茂】 盛んにすげたる事。晋書文苑傳「嘉慶一、陳諸列傳」
 【茂竹】 生ひしげりたる竹。北史楊惲傳「宅內有茂竹」
 【茂木】 しげりたる木。魏書「茂木」
 【茂林】 しげりたる林。王羲之蘭亭集序「此地有崇山峻嶺、茂林修竹」
 【茂陵】 漢の武帝の陵の名。陝西省興平縣の東北に在り。司馬相如病みて此に家居せり。

【苜】 苜蓿の根。漢書禮樂志「青陽開動、根一以遂」
 【苳】 苳草の根。漢書禮樂志「青陽開動、根一以遂」

【苳】 苳草の根。漢書禮樂志「青陽開動、根一以遂」
 【苳】 苳草の根。漢書禮樂志「青陽開動、根一以遂」

【苳】 苳草の根。漢書禮樂志「青陽開動、根一以遂」
 【苳】 苳草の根。漢書禮樂志「青陽開動、根一以遂」

【苳】 苳草の根。漢書禮樂志「青陽開動、根一以遂」
 【苳】 苳草の根。漢書禮樂志「青陽開動、根一以遂」

【荒】 ある(蕪)草が地を掩ふ。あれち「蕪地」○果物穀類がみならず「蕪」韓詩外傳「四穀不升曰「○やぶる(敗)すつ。すたる(廢)○みだる(亂)○むなし(空)○すさむ、おほる、迷ひ亂る。○おほふ(掩)蒙)詩、周南「葛藟」之「○くらし、心がうつとりとする。○慌。○かたほとり、國のはて、えびす(邊裔)賈誼、過秦論「併吞八」○大いなり。又大いにする。○唐詩「○はどりさめなし。○國、亂暴。」

【荒】 ある(蕪)草が地を掩ふ。あれち「蕪地」○果物穀類がみならず「蕪」韓詩外傳「四穀不升曰「○やぶる(敗)すつ。すたる(廢)○みだる(亂)○むなし(空)○すさむ、おほる、迷ひ亂る。○おほふ(掩)蒙)詩、周南「葛藟」之「○くらし、心がうつとりとする。○慌。○かたほとり、國のはて、えびす(邊裔)賈誼、過秦論「併吞八」○大いなり。又大いにする。○唐詩「○はどりさめなし。○國、亂暴。」

【荒】 ある(蕪)草が地を掩ふ。あれち「蕪地」○果物穀類がみならず「蕪」韓詩外傳「四穀不升曰「○やぶる(敗)すつ。すたる(廢)○みだる(亂)○むなし(空)○すさむ、おほる、迷ひ亂る。○おほふ(掩)蒙)詩、周南「葛藟」之「○くらし、心がうつとりとする。○慌。○かたほとり、國のはて、えびす(邊裔)賈誼、過秦論「併吞八」○大いなり。又大いにする。○唐詩「○はどりさめなし。○國、亂暴。」

【荒】 ある(蕪)草が地を掩ふ。あれち「蕪地」○果物穀類がみならず「蕪」韓詩外傳「四穀不升曰「○やぶる(敗)すつ。すたる(廢)○みだる(亂)○むなし(空)○すさむ、おほる、迷ひ亂る。○おほふ(掩)蒙)詩、周南「葛藟」之「○くらし、心がうつとりとする。○慌。○かたほとり、國のはて、えびす(邊裔)賈誼、過秦論「併吞八」○大いなり。又大いにする。○唐詩「○はどりさめなし。○國、亂暴。」

【荆】ケイ 正荆は正字

○いばら、うばら(茨)「棘」

「柴」○にんじんほく(楚木)

○しもと、荊刑に用ふる杖。○

己の妻の謙稱、後漢の梁鴻の妻孟光がいばらのかんざしをさしたる故事に本づく「妻」

「拙」○支那の古の九州の一、今の湖南湖北兩省並に廣東の北部、貴州、四川、廣西の東部を奄有す。

【荆布】 謝罪の意を表する爲めに背にしもとを貫ふ。むちうたんことを望むなり。史、廉頗傳「肉袒負荆」

【荆布】 春秋時代、楚國の陣法。左、莊四、楚武王「授師子焉」

【荆布】 いばらと、はしばみと。木ばやしをいふ。吳、浮丘仙賦「攀荆布、陟堆埼、臨絕壁、俯清溪」

【葭】ケウ 此

こあふひ、せにあふひ。葵の一種、莖は直立し高三四尺、花は一寸餘、淡紫色にして瓣に深紫色の線紋あり。荆葵、錦葵花。

【苦】クツ 此

【荆】ケイ 正荆は正字

○いばら、うばら(茨)「棘」

「柴」○にんじんほく(楚木)

○しもと、荊刑に用ふる杖。○

【荆】ケイ 正荆は正字

○いばら、うばら(茨)「棘」

「柴」○にんじんほく(楚木)

○しもと、荊刑に用ふる杖。○

【荆】ケイ 正荆は正字

○いばら、うばら(茨)「棘」

「柴」○にんじんほく(楚木)

○しもと、荊刑に用ふる杖。○

【草】サ 此

○くさ「豊」「水」「蔓」「腐」「春」「香」「芳」「毒」「毒」

○のほら。○あらし、そまつ(粗)

「具」○はじめ(創初)はじむ(始)「創」○いやし(部)「野」○轉じて在野の稱「茅」「澤」○お(す)起(起)○し(造次)○詩文のしたがき「稿」「諫」したがきを書き起す。後漢書、陳寵傳「蕭何」律書體の名、行書を更にくつしたるもの「眞行」○「い」はうれへる貌。又、いそぐ、いはし。○勿勿、又、てがる(荷)

【葭】ケウ 此

こあふひ、せにあふひ。葵の一種、莖は直立し高三四尺、花は一寸餘、淡紫色にして瓣に深紫色の線紋あり。荆葵、錦葵花。

【葭】ケウ 此

こあふひ、せにあふひ。葵の一種、莖は直立し高三四尺、花は一寸餘、淡紫色にして瓣に深紫色の線紋あり。荆葵、錦葵花。

【葭】ケウ 此

こあふひ、せにあふひ。葵の一種、莖は直立し高三四尺、花は一寸餘、淡紫色にして瓣に深紫色の線紋あり。荆葵、錦葵花。

【葭】ケウ 此

こあふひ、せにあふひ。葵の一種、莖は直立し高三四尺、花は一寸餘、淡紫色にして瓣に深紫色の線紋あり。荆葵、錦葵花。

【苦】クツ 此

【荆】ケイ 正荆は正字

○いばら、うばら(茨)「棘」

「柴」○にんじんほく(楚木)

○しもと、荊刑に用ふる杖。○

【荆】ケイ 正荆は正字

○いばら、うばら(茨)「棘」

「柴」○にんじんほく(楚木)

○しもと、荊刑に用ふる杖。○

【荆】ケイ 正荆は正字

○いばら、うばら(茨)「棘」

「柴」○にんじんほく(楚木)

○しもと、荊刑に用ふる杖。○

【葭】ケウ 此

こあふひ、せにあふひ。葵の一種、莖は直立し高三四尺、花は一寸餘、淡紫色にして瓣に深紫色の線紋あり。荆葵、錦葵花。

【葭】ケウ 此

こあふひ、せにあふひ。葵の一種、莖は直立し高三四尺、花は一寸餘、淡紫色にして瓣に深紫色の線紋あり。荆葵、錦葵花。

【葭】ケウ 此

こあふひ、せにあふひ。葵の一種、莖は直立し高三四尺、花は一寸餘、淡紫色にして瓣に深紫色の線紋あり。荆葵、錦葵花。

【葭】ケウ 此

こあふひ、せにあふひ。葵の一種、莖は直立し高三四尺、花は一寸餘、淡紫色にして瓣に深紫色の線紋あり。荆葵、錦葵花。

【葭】ケウ 此

こあふひ、せにあふひ。葵の一種、莖は直立し高三四尺、花は一寸餘、淡紫色にして瓣に深紫色の線紋あり。荆葵、錦葵花。

【苦】クツ 此

【荆】ケイ 正荆は正字

○いばら、うばら(茨)「棘」

「柴」○にんじんほく(楚木)

○しもと、荊刑に用ふる杖。○

【荆】ケイ 正荆は正字

○いばら、うばら(茨)「棘」

「柴」○にんじんほく(楚木)

○しもと、荊刑に用ふる杖。○

【荆】ケイ 正荆は正字

○いばら、うばら(茨)「棘」

「柴」○にんじんほく(楚木)

○しもと、荊刑に用ふる杖。○

【葭】ケウ 此

こあふひ、せにあふひ。葵の一種、莖は直立し高三四尺、花は一寸餘、淡紫色にして瓣に深紫色の線紋あり。荆葵、錦葵花。

【葭】ケウ 此

こあふひ、せにあふひ。葵の一種、莖は直立し高三四尺、花は一寸餘、淡紫色にして瓣に深紫色の線紋あり。荆葵、錦葵花。

【葭】ケウ 此

こあふひ、せにあふひ。葵の一種、莖は直立し高三四尺、花は一寸餘、淡紫色にして瓣に深紫色の線紋あり。荆葵、錦葵花。

【葭】ケウ 此

こあふひ、せにあふひ。葵の一種、莖は直立し高三四尺、花は一寸餘、淡紫色にして瓣に深紫色の線紋あり。荆葵、錦葵花。

【葭】ケウ 此

こあふひ、せにあふひ。葵の一種、莖は直立し高三四尺、花は一寸餘、淡紫色にして瓣に深紫色の線紋あり。荆葵、錦葵花。

【苦】クツ 此

【荆】ケイ 正荆は正字

○いばら、うばら(茨)「棘」

「柴」○にんじんほく(楚木)

○しもと、荊刑に用ふる杖。○

【荆】ケイ 正荆は正字

○いばら、うばら(茨)「棘」

「柴」○にんじんほく(楚木)

○しもと、荊刑に用ふる杖。○

【荆】ケイ 正荆は正字

○いばら、うばら(茨)「棘」

「柴」○にんじんほく(楚木)

○しもと、荊刑に用ふる杖。○

【葭】ケウ 此

こあふひ、せにあふひ。葵の一種、莖は直立し高三四尺、花は一寸餘、淡紫色にして瓣に深紫色の線紋あり。荆葵、錦葵花。

【菴】(カウ) 〇なご。詩、召南、蟋蟀。注、蟋蟀。〇草間に棲むすべの蟲類。
 【菴】(カウ) 草を刈りたひらげる。韓愈文、一而食二備之、盡二根株、痛斷乃止。〇菴。
 【菴田】(カウ) 未だ開墾せざる田。漢書、關中、一注、一謂三菴田未耕墾也。
 【菴店】(カウ) くらぶきのやどや。吳韻詩、一月初冷、村風迂更長。
 【菴頭】(カウ) はすも、草葉の上。杜甫詩、富貴何如一菴。一露は久しきを待し難きに喩ふ。
 【菴芽】(カウ) くらぶき、ちがやと、轉じて在野の義。一之臣。唐書、馬周傳、由二介一、一官二大事。一草芽。
 【菴芽危言】(カウ) 民間に居りて國政を痛論する。李觀、袁州學記、一者、折首而不悔。
 【菴如走】(カウ) 草書の勢の形容。東坡志林、眞生、行生、草眞如立、行如行。一。
 【菴風】(カウ) 草の風になびく如くなびきたがふ。閑居賦、訓若二風行、應立、行如行。一。
 【菴野】(カウ) 野人等のもの。禮、郊特牲、野夫黃冠、黃冠一也。
 【菴木】(カウ) 〇したがき、草稿の底本。晉書、傅祗傳、一草案。〇さ、菴の質の柔かき植物。木本の對。

【菴】(カウ) 詔の文を草する。唐の制、黃麻紙を用いて詔を寫すが故。蓋唐書、章弘景傳、一草詔。
 【菴】(カウ) 世の明けはじめにて未だ冥味の時をいふ。易、屯卦、天造一宜、建侯而不寧。
 【菴之臣】(カウ) 仕官せずして草野中に在る者。孟、萬章、在國曰市井之臣、在野曰一。一草茅之臣。
 【菴木】(カウ) 草と木と。易、坤卦、文言、百穀一麗乎土。一。
 【菴木黃落】(カウ) 秋の末に、草木の葉が黄ばみおちる。禮、月令、季秋之月、一鴻雁來賓。一。
 【菴木忍生】(カウ) 菴木が春に當りて奮ひて芽を出す義。莊、外物、一言乘、陽氣、奮出而不可遏也。一。
 【菴木俱腐】(カウ) 大條に同じ。唐書、古來賢豪、不遭二異運、埋光滅采、與草木俱腐者、可三勝咤。一。
 【菴木俱朽】(カウ) くらぶきと共にくちはてる。世に開ゆることなくして死する。後漢書、朱穆傳、彼與一草木俱朽、此與二金石一相傾。一。
 【菴木皆兵】(カウ) 敵兵を畏るの餘り、全山の草木皆敵兵と見ゆるをいふ。晉書、苻堅載記、堅登城望二八公山、草木皆類、人形、顧謂苻融曰、此助敵也、何謂兵少乎。一。
 【菴野】(カウ) 〇いやし。史、韓非傳、一而倍侮。〇民間、在野の義。杜預文

【菴】(カウ) 布行於一。著、德於閭閻。一。
 【菴】(カウ) あれはてたる地。史、越世家、文、身斷髮、披一、而邑居焉。一。
 【菴】(カウ) わらわつ、わらわつのはきも。五色線、或乘二榮車、或隨一。一。〇菴。
 【菴】(カウ) 草書と、隸書(楷書)と(書斷)。一。
 【菴】(カウ) くらぶきのいへ。戴表元詩、夢覺依然一。一。
 【菴】(カウ) くらぶきの上のつゆ。王傑詩、一沾我衣。一。
 【菴】(カウ) くらぶきのいなり。諸葛亮前出師表、三顧臣於一之中。一。
 【菴】(カウ) 結草(四六八三三)を
 【菴】(カウ) 甲を惹きて乙を誓むるにいふ。開元遺事、王魯爲富登幸、請賞爲一、會部民連狀、訴主簿貪賄、魯即判曰、汝雖打草、吾已蛇驚。一。
 【菴】(カウ) 疲勞。
 【菴】(カウ) つかれ。つかれ、疲勞。
 【菴】(カウ) 〇いばら、うばら、刺がある小灌木の總稱。〇かや、屋根を葺くに用ふ。茅。〇ふく、茅にて屋根を葺く。莊、讓王、環堵之室、以生草くさぶき。〇あつむ(衆)つむ(積)詩、小雅、會孫之嫁、如一如梁。〇はま

びし(菴菴)地に布き生ずる一種の蔓草、夏時黃花を著け、三稜ある實を結ぶ。
 【菴】(カウ) いばら。ひなかの菴。後漢書、仲長統傳、清潔之士、徒自苦于一之間。一。〇菴。
 【菴】(カウ) 菴姑の異名。本草綱目、一菴草。〇草をやねにふく。柳宗元文、築室一、爲二圃于湘之西。一。〇いばらと、くらぶきと。宋書、樂志、一菴。一。
 【菴】(カウ) いばらのかき。周禮、師、一説、はまびしのかき。詩、鄜風、一。一。
 【菴】(カウ) 菴如梁。菴如梁の菴むが如く多きをいふ。菴は屋梁、梁は橋、其の高大なるに喩ふ。詩、小雅、會孫之嫁、一。一。
 【菴】(カウ) 一。
 【菴】(カウ) 〇ます、ますます(益)滋に通ず。漢書、賦、飲一重。〇むしろ、わらのむしろ(毒麻)〇(一)

に、これ、この(此)菴(一三三)頁三段)と混用せしなり。〇とし(年)今一、來一とき(時)。
 【菴】(カウ) 菴の別は愛(一九九)頁二の條を見よ。
 【菴】(カウ) かやうである。陶潛詩、一。一。
 【菴】(カウ) 小人顔色。賦、而心内一爲一。一。柔軟怯弱。
 【菴】(カウ) 歳月のだんだんに延びる(漸進)貌。張華、勵志詩、日歎月歎、一。一。一。
 【菴】(カウ) 〇やはらかなる貌。詩、大雅、一柔木。〇歳月がながびく。一。一。
 【菴】(カウ) 〇やはらかなる貌。葉は橢圓形にして厚く、黄緑の小花を開く、實は簇生す。九月九日(重陽)に高山に上りて此の實を頭に挿めば邪氣を拂ふと

【菴】(カウ) 〇やはらかなる貌。葉は橢圓形にして厚く、黄緑の小花を開く、實は簇生す。九月九日(重陽)に高山に上りて此の實を頭に挿めば邪氣を拂ふと

【菴】(カウ) 〇やはらかなる貌。葉は橢圓形にして厚く、黄緑の小花を開く、實は簇生す。九月九日(重陽)に高山に上りて此の實を頭に挿めば邪氣を拂ふと

【菴】(カウ) 〇やはらかなる貌。葉は橢圓形にして厚く、黄緑の小花を開く、實は簇生す。九月九日(重陽)に高山に上りて此の實を頭に挿めば邪氣を拂ふと

○ 艸部 (六) 菴 菴 菴 菴 菴 菴 菴 菴 菴 菴

一六三九

【萬族】おほくのやから。陶潜詩「一各有託、孤雲何無依」。

【萬派】おほくのえだがは。李建勳詩「一争流雨過時」。

【萬民】よるづつのため。易、謙卦、勞謙君子一服也。

【萬目】おほくの目。衆くの人がある。

【萬族】おほくのやから。陶潜詩「一各有託、孤雲何無依」。

【萬卒】おほくの兵士。

【萬衆】あまたの衆。萬族。

【萬物】おほくの物。萬物。

【萬物】おほくの物。萬物。

【萬物】おほくの物。萬物。

【萬方】おほくのえだがは。李建勳詩「一争流雨過時」。

【萬邦】おほくのくにに。書、堯典、協和萬邦。

【萬物】おほくの物。萬物。

【萬物】おほくの物。萬物。

【萬物】おほくの物。萬物。

【萬里】おほくの遠きも。萬里。

【萬里】おほくの遠きも。萬里。

【萬里】おほくの遠きも。萬里。

【萬里】おほくの遠きも。萬里。

【萬里】おほくの遠きも。萬里。

【萬目】おほくの目。衆くの人がある。

【萬目】おほくの目。衆くの人がある。

【萬目】おほくの目。衆くの人がある。

【萬目】おほくの目。衆くの人がある。

【萬目】おほくの目。衆くの人がある。

【益】おほくの盛んなる貌。

【葡】おほくの盛んなる貌。

【葑】おほくの盛んなる貌。

【落】おほくの盛んなる貌。

【葑】おほくの盛んなる貌。

【落】おほくの盛んなる貌。

【落】おほくの盛んなる貌。

【葑】おほくの盛んなる貌。

【落】おほくの盛んなる貌。

【葑】おほくの盛んなる貌。

【落】おほくの盛んなる貌。

「ららみをとくはへる。」

【驚音機】^{アキ}音聲をたたくはへ、必要の時を發せしむる機械。蘇音機、雷聲機。

【驚火】^{アキ}火種をたたくはへる。淮南子「以其所修而遊不用之形、辟猶樹荷山上、一葉一中亡。」

【驚財】^{アキ}金銀をたたくはへ。貯金。

【驚思】^{アキ}つものおもひ。嘯賦「舒」

「之構憤、奮久結之縲縲。」

【驚衆】^{アキ}つみたたくはへる。詩「邶風、美」

「驚」

【驚相】^{アキ}事に怠る。漢書、息夫躬傳「丞相王嘉、健而一、不可用。」

【驚」^{アキ}〇つみたたくはへる。〇音

積。〇つみたたくはへる。〇音

用。兵自強。〇貯蓄。

【驚世】^{アキ}驚めると散らすと。崔融文

「一、驚」

【驚電機】^{アキ}多量の電氣を驚へる機

器。レイデン瓶、集電器の類。

【驚念】^{アキ}つものおもひ。柳宗元詩

「驚」

【驚」^{アキ}かみの毛をのばしたくは

へる。〇。

【驚米】^{アキ}こめをとくはへる。五代

史、劉鄩傳、將軍一、將軍一、

【驚」^{アキ}動搖をふせぐ為めにまに

てつめる車輪。漢書、武帝紀、安

車一、東郡加、

【驚」^{アキ}がまと、あしと。盧は廣、生

じ易く成長速かなるもの。政治の

行はれ易きに喩ふ。一説に、

【驚」^{アキ}も、をさなきもの(幼者)「童

一」幼一「啓一〇あざむく

(欺)左、倍二四「上下相一〇

かゝむる、かゝぶる、うける

(受)「一思一命」〇らる、せ

らる(被)〇つむ(裏)おほふ

【勞】

牛一は、根は長さ二三尺、色黒

【莖】

一麻は、葉は細長く、夏日、矛形

【葦】

一莖は、葉は細長く、夏日、矛形

【蒲】

〇がま、水草の一、莖の高さ四

〇くさぶきのまるやね。〇古

【蒲】^{アキ}伏菊に通ず。〇蒲は菊

【蒲】^{アキ}良田變生一〇〇葉蒲

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

嶺南以蒲菜爲之。

【蒲】^{アキ}がまむしろ。釋名、青齊

【蒲】^{アキ}がまむしろにて造りたる

【蒲】^{アキ}唐書、李密傳「以一、乘、牛、

【蒲】^{アキ}掛漢書「一、行且讀」

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

○ 補 部 (十畫) 驚・勞・莖・葦・蒲

一六六九

「ららみをとくはへる。」

【驚音機】^{アキ}音聲をたたくはへ、必要の時を發せしむる機械。蘇音機、雷聲機。

【驚火】^{アキ}火種をたたくはへる。淮南子「以其所修而遊不用之形、辟猶樹荷山上、一葉一中亡。」

【驚財】^{アキ}金銀をたたくはへ。貯金。

【驚思】^{アキ}つものおもひ。嘯賦「舒」

「之構憤、奮久結之縲縲。」

【驚衆】^{アキ}つみたたくはへる。詩「邶風、美」

【驚相】^{アキ}事に怠る。漢書、息夫躬傳「丞相王嘉、健而一、不可用。」

【驚」^{アキ}〇つみたたくはへる。〇音

積。〇つみたたくはへる。〇音

用。兵自強。〇貯蓄。

【驚世】^{アキ}驚めると散らすと。崔融文

「一、驚」

【驚電機】^{アキ}多量の電氣を驚へる機

器。レイデン瓶、集電器の類。

【驚念】^{アキ}つものおもひ。柳宗元詩

【驚」^{アキ}かみの毛をのばしたくは

へる。〇。

【驚米】^{アキ}こめをとくはへる。五代

史、劉鄩傳、將軍一、將軍一、

【驚」^{アキ}動搖をふせぐ為めにまに

てつめる車輪。漢書、武帝紀、安

車一、東郡加、

【驚」^{アキ}がまと、あしと。盧は廣、生

じ易く成長速かなるもの。政治の

行はれ易きに喩ふ。一説に、

【驚」^{アキ}も、をさなきもの(幼者)「童

一」幼一「啓一〇あざむく

(欺)左、倍二四「上下相一〇

かゝむる、かゝぶる、うける

(受)「一思一命」〇らる、せ

らる(被)〇つむ(裏)おほふ

【蒙】

〇くらし(闇)「冥一〇こと

【捕】

〇博一^{アキ}はばくち、ばくえき

(博奕)博物志「老子入胡作博

一〇捕戲。〇がま、蒲に通ず。

嶺南以蒲菜爲之。

【蒲】^{アキ}がまむしろ。釋名、青齊

【蒲】^{アキ}がまむしろにて造りたる

【蒲】^{アキ}唐書、李密傳「以一、乘、牛、

【蒲】^{アキ}掛漢書「一、行且讀」

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

【蒲】^{アキ}がまにて作りたるむしろ。

く聲。○さわがしく勞動する。○いそがしくつかる。○男女相愛する者の稱。「一郎」「一娘」「つしむ」蕭に通ず。○姓「一何」「一衍」。

【蕭何】 沛の豊の人、漢の高祖に從ひて關に入るに及び、獨り先づ秦の律令及び圖書を收めて之を藏す。漢楚の雄を爭ふや、何常に關中を守り、魏帥を轉給し、軍中乏しきことなからしむ。天下既に定り功第一を以て鄂侯に封ぜらる。關國の名相たり。

【蕭瑟】 瑟瑟と音に清き貌。南史「俄而蕭瑟至、神韻一一」蕭瑟。【蕭蕭】 漢の高祖の功臣、蕭何と曹參と。漢書、丙吉傳「高祖開基、一一爲一冠」。

【蕭瑟】 ものさびしき貌。蕭瑟。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。

【蕭瑟】 ものさびしき貌。蕭瑟。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。

【蕭瑟】 ものさびしき貌。蕭瑟。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。

【蕭瑟】 ものさびしき貌。蕭瑟。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。

【蕭瑟】 ものさびしき貌。蕭瑟。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。

【蕭瑟】 ものさびしき貌。蕭瑟。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。

【蕭瑟】 ものさびしき貌。蕭瑟。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。

【薛】 香蔕、藥葉轉「一」。班固、西都賦「原野一一」蕭宋、蕭蕭。【薛郎】 愛する男子の稱。又、夫と、全唐詩話「侯門一入深如海、從此一一一是路人」。

【薛】 香蔕、藥葉轉「一」。班固、西都賦「原野一一」蕭宋、蕭蕭。【薛郎】 愛する男子の稱。又、夫と、全唐詩話「侯門一入深如海、從此一一一是路人」。

【薛】 香蔕、藥葉轉「一」。班固、西都賦「原野一一」蕭宋、蕭蕭。【薛郎】 愛する男子の稱。又、夫と、全唐詩話「侯門一入深如海、從此一一一是路人」。

【薛】 香蔕、藥葉轉「一」。班固、西都賦「原野一一」蕭宋、蕭蕭。【薛郎】 愛する男子の稱。又、夫と、全唐詩話「侯門一入深如海、從此一一一是路人」。

【薛】 香蔕、藥葉轉「一」。班固、西都賦「原野一一」蕭宋、蕭蕭。【薛郎】 愛する男子の稱。又、夫と、全唐詩話「侯門一入深如海、從此一一一是路人」。

士に至りて致仕す、謀して文清といふ、學躬行を貴び、明朝理學の宗たり、讀書録を著す。

【薛】 香蔕、藥葉轉「一」。班固、西都賦「原野一一」蕭宋、蕭蕭。【薛郎】 愛する男子の稱。又、夫と、全唐詩話「侯門一入深如海、從此一一一是路人」。

【薛】 香蔕、藥葉轉「一」。班固、西都賦「原野一一」蕭宋、蕭蕭。【薛郎】 愛する男子の稱。又、夫と、全唐詩話「侯門一入深如海、從此一一一是路人」。

【薛】 香蔕、藥葉轉「一」。班固、西都賦「原野一一」蕭宋、蕭蕭。【薛郎】 愛する男子の稱。又、夫と、全唐詩話「侯門一入深如海、從此一一一是路人」。

【薛】 香蔕、藥葉轉「一」。班固、西都賦「原野一一」蕭宋、蕭蕭。【薛郎】 愛する男子の稱。又、夫と、全唐詩話「侯門一入深如海、從此一一一是路人」。

之者、衍辭不實、仕に推舉。

【蕭瑟】 ものさびしき貌。蕭瑟。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。

【蕭瑟】 ものさびしき貌。蕭瑟。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。

【蕭瑟】 ものさびしき貌。蕭瑟。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。

【蕭瑟】 ものさびしき貌。蕭瑟。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。

【蕭瑟】 ものさびしき貌。蕭瑟。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。

【蕭瑟】 ものさびしき貌。蕭瑟。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。

【蕭瑟】 ものさびしき貌。蕭瑟。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。【蕭蕭】 ものさびしき貌。蕭蕭。

【薔】 タン
おぼば、馬鳥・車前。

【薔】 タン
おぼば、馬鳥・車前。

【薔】 タン
おぼば、馬鳥・車前。

【薔】 タン
おぼば、馬鳥・車前。

【薔】 タン
おぼば、馬鳥・車前。

【薔】 タン
おぼば、馬鳥・車前。

【薔】 タン
おぼば、馬鳥・車前。

【薔】 タン
おぼば、馬鳥・車前。

【薔】 タン
おぼば、馬鳥・車前。

【薔】 タン
おぼば、馬鳥・車前。

【葦】^{アサ} 葦が其の夫を稱していふ。品字義に、葦は葦石なり、美石を葦夫と名づく、故に葦石を借りて以て夫に喩ふ、一説に葦石は農家の掘草石なり、葦石の切音は天とす、婦人は夫を以て天とす、故に夫の字の隱語とす。古樂府「一何今何在、山上更有山、何當大刀頭、破鏡飛上天」

【葦】^{ギョウ} 一、葦は禾の茂れる貌。詩、小雅「或耘或耔、黍稷薿一」

【薰】^{カン} 〇かをりぐさ、香草の一、蘭の類。葉は細長く對生し、赤花黒實をつく、古人之をおびて惡氣をふせぐ、故に佩蘭ともいふ。一、葦草。〇かをり(香氣)「餘一」蘭一〇かをり、にほふ。〇やく(灼)くすべら、たく、薰に通ず。〇香氣に近づきて、つりかがる。轉じて善人に親みて善化する。「化一〇一然温和なる貌。莊子「然慈仁」又、耳目の明かなる貌。〇いさを、動に通ず。〇

【薰】^{カン} 〇かをりぐさ、香草の一、蘭の類。葉は細長く對生し、赤花黒實をつく、古人之をおびて惡氣をふせぐ、故に佩蘭ともいふ。一、葦草。〇かをり(香氣)「餘一」蘭一〇かをり、にほふ。〇やく(灼)くすべら、たく、薰に通ず。〇香氣に近づきて、つりかがる。轉じて善人に親みて善化する。「化一〇一然温和なる貌。莊子「然慈仁」又、耳目の明かなる貌。〇いさを、動に通ず。〇

一育はえひすの名、一は蕉に通ず。一蕉。【葦】^{アサ} 葦が其の夫を稱していふ。品字義に、葦は葦石なり、美石を葦夫と名づく、故に葦石を借りて以て夫に喩ふ、一説に葦石は農家の掘草石なり、葦石の切音は天とす、婦人は夫を以て天とす、故に夫の字の隱語とす。古樂府「一何今何在、山上更有山、何當大刀頭、破鏡飛上天」

【葦】^{ギョウ} 一、葦は禾の茂れる貌。詩、小雅「或耘或耔、黍稷薿一」

【薰】^{カン} 〇かをりぐさ、香草の一、蘭の類。葉は細長く對生し、赤花黒實をつく、古人之をおびて惡氣をふせぐ、故に佩蘭ともいふ。一、葦草。〇かをり(香氣)「餘一」蘭一〇かをり、にほふ。〇やく(灼)くすべら、たく、薰に通ず。〇香氣に近づきて、つりかがる。轉じて善人に親みて善化する。「化一〇一然温和なる貌。莊子「然慈仁」又、耳目の明かなる貌。〇いさを、動に通ず。〇

【薰】^{カン} 〇かをりぐさ、香草の一、蘭の類。葉は細長く對生し、赤花黒實をつく、古人之をおびて惡氣をふせぐ、故に佩蘭ともいふ。一、葦草。〇かをり(香氣)「餘一」蘭一〇かをり、にほふ。〇やく(灼)くすべら、たく、薰に通ず。〇香氣に近づきて、つりかがる。轉じて善人に親みて善化する。「化一〇一然温和なる貌。莊子「然慈仁」又、耳目の明かなる貌。〇いさを、動に通ず。〇

【薩】^{サツ} 〇すく(濟)〇昔一は佛語、善は昔一は濟、昔く衆生を濟ふの義。善(帥部八畫)を見よ。

【薩】^{サツ} 〇すく(濟)〇昔一は佛語、善は昔一は濟、昔く衆生を濟ふの義。善(帥部八畫)を見よ。

【薩】^{サツ} 〇すく(濟)〇昔一は佛語、善は昔一は濟、昔く衆生を濟ふの義。善(帥部八畫)を見よ。

【薩】^{サツ} 〇すく(濟)〇昔一は佛語、善は昔一は濟、昔く衆生を濟ふの義。善(帥部八畫)を見よ。

【藉】^{ジヤク} 〇しく、草を物の下にしく。

は、其の才をつつみ噛ます能はずして卻つて其の身を害ふに喩ふ。漢書、張敖傳「一、青以明自銷」【葦】^{アサ} 葦が其の夫を稱していふ。品字義に、葦は葦石なり、美石を葦夫と名づく、故に葦石を借りて以て夫に喩ふ、一説に葦石は農家の掘草石なり、葦石の切音は天とす、婦人は夫を以て天とす、故に夫の字の隱語とす。古樂府「一何今何在、山上更有山、何當大刀頭、破鏡飛上天」

【葦】^{アサ} 葦が其の夫を稱していふ。品字義に、葦は葦石なり、美石を葦夫と名づく、故に葦石を借りて以て夫に喩ふ、一説に葦石は農家の掘草石なり、葦石の切音は天とす、婦人は夫を以て天とす、故に夫の字の隱語とす。古樂府「一何今何在、山上更有山、何當大刀頭、破鏡飛上天」

【葦】^{ギョウ} 一、葦は禾の茂れる貌。詩、小雅「或耘或耔、黍稷薿一」

【薰】^{カン} 〇かをりぐさ、香草の一、蘭の類。葉は細長く對生し、赤花黒實をつく、古人之をおびて惡氣をふせぐ、故に佩蘭ともいふ。一、葦草。〇かをり(香氣)「餘一」蘭一〇かをり、にほふ。〇やく(灼)くすべら、たく、薰に通ず。〇香氣に近づきて、つりかがる。轉じて善人に親みて善化する。「化一〇一然温和なる貌。莊子「然慈仁」又、耳目の明かなる貌。〇いさを、動に通ず。〇

【葦】^{アサ} 葦が其の夫を稱していふ。品字義に、葦は葦石なり、美石を葦夫と名づく、故に葦石を借りて以て夫に喩ふ、一説に葦石は農家の掘草石なり、葦石の切音は天とす、婦人は夫を以て天とす、故に夫の字の隱語とす。古樂府「一何今何在、山上更有山、何當大刀頭、破鏡飛上天」

【葦】^{ギョウ} 一、葦は禾の茂れる貌。詩、小雅「或耘或耔、黍稷薿一」

【葦】^{アサ} 葦が其の夫を稱していふ。品字義に、葦は葦石なり、美石を葦夫と名づく、故に葦石を借りて以て夫に喩ふ、一説に葦石は農家の掘草石なり、葦石の切音は天とす、婦人は夫を以て天とす、故に夫の字の隱語とす。古樂府「一何今何在、山上更有山、何當大刀頭、破鏡飛上天」

【葦】^{アサ} 葦が其の夫を稱していふ。品字義に、葦は葦石なり、美石を葦夫と名づく、故に葦石を借りて以て夫に喩ふ、一説に葦石は農家の掘草石なり、葦石の切音は天とす、婦人は夫を以て天とす、故に夫の字の隱語とす。古樂府「一何今何在、山上更有山、何當大刀頭、破鏡飛上天」

【葦】^{アサ} 葦が其の夫を稱していふ。品字義に、葦は葦石なり、美石を葦夫と名づく、故に葦石を借りて以て夫に喩ふ、一説に葦石は農家の掘草石なり、葦石の切音は天とす、婦人は夫を以て天とす、故に夫の字の隱語とす。古樂府「一何今何在、山上更有山、何當大刀頭、破鏡飛上天」

【蘇生】サキよみがへる。回生・更生。蘇活。
 【蘇小小】セコ、錢塘の名妓の名。轉じて廣く蘇妓の稱とす。吳地記「蘇小小前有言妓一墓」蘇小小。
 【蘇蘇】ササのつくる貌。又、恐れて安んぜざる貌。又、躁ぎ動く貌。易、震卦「震一」。
 【蘇息】サス、若をのがれていこひやすむ。書經「后来其蘇」待我君來。其可「宋史、陳良傳、陸興初與金人約和、天下忻然、幸得」。
 【蘇長公】ソウ、蘇軾(東坡)をいふ。長とは洵の長男にて軾の兄なるが故。
 【蘇張舌】ソウ、蘇秦は六國の君に游説し、合従して秦に當らしむ。張儀は六國を連れて秦に事へし。二人共に辯舌に長ず、よりに策士などの雄辯を稱していふ。杜甫詩「卻假一」。高談周宋饋。
 【蘇轍】ソウ、字は子由、蘇洵の第二子にして軾の弟なり。年十九、父兄に隨ひ京都に至り、兄弟同じく進士の科に登り、歷進して尙書右丞と爲り、門下侍郎に遷る。徽宗位に即き、出でて永州・岳州に知たり。崇寧中致仕し、室を許に築き、穎濱遺老と號し、また麟城と號す。政和二年没す。年七十四。文定と號す。著す所る。老子解、古史、詩傳、春秋。

傳・魏城集あり、魏性安詳高潔、文その人と爲りに似たり。
 【蘇鐵】ソウ、園觀賞用植物の一、楡頭に羽狀の葉を叢生す。性鐵氣を好む。蘇尾蕪。
 【蘇東坡】ソウ、蘇軾を見よ。
 【蘇武】ソウ、字は子卿、漢の杜陵の人。武帝以て匈奴に使せしむ。至れば即ち單于、之を降さんと欲す。武從はず、乃ち武を管中に幽して、飲食を給せず。天雪ふる。武雪と旣毛とを併せ嚼みて、之を咽む。數日を経て死せず。匈奴以て神なりとす。乃ち武を北海上に徙して、旣を牧せしめて曰く、旣乳せば歸らしめん。昭帝位に即きて、武始めて還ることを得たり。匈奴に留ること十九年。始め住きしとき強壯なりしも、還るに及びて、鬢髮盡く白し。宣帝立ちて爵關内侯を賜ふ。年八十餘にして卒す。形を麒麟間に圖せしむ。
 【蘇木】ソウ、蘇枋に同じ。
 【蘇迷感】ソウ、關楚語、須彌山を音譯。蘇迷名義集「一、西域記云、唐云妙高、舊曰須彌」。
 【蘇門壩】ソウ、蘇のすべたるうそぶき。晉の孫登の故事。晉書、阮籍傳「籍嘗於蘇門山遇孫登、與商略終古、及二栖神道氣之術、登皆不應、因長嘯而退、至半嶺聞其聲若二宮風之音、遂乎崖谷乃登之壩」。

也。
 【蘇老泉】ソウ、蘇洵を見よ。
 【蘇枋】ソウ、熱地に産する喬木黄花を著く。材は楊弓などに作り、其の削屑は赤紫色の染料とす。南方草木志「一出九真、南人以染、蘇枋、蘇枋、蘇木」。
 【揀】タラ、
 ○おちば、かれは。詩、幽風「十月隕一〇竹の皮」。
 【蘇】ソウ、
 一活ツツはししうと。獨活。
 【養】ヤウ、
 つとむ(勉)書、洛誥「汝乃是不」。
 【蒨】シン、
 うきくさの一、根は泥中に蔓延し、葉は四枚に分れ、田字の状を成す。夏日、四瓣の小白花開く。萍の大いなる者、かたばみも、かつみ。詩、召南「于以采」。田字草。
 【蒨花】シン、うきくさのはな。柳宗元詩「香風無限滿湘意、欲采、不自由」。

【蒨藤】シン、かたばみとも、も。みづくさ。張九齡詩「一生南浦」。漢類。
 【蒨】シン、うきくさとしるよもぎと。左、鹽三「荷有明信、淵溪沼注之毛」。蒨菜之菜(中略)可應。子鬼神、可羞。子王侯。樹風詩「蒨雨晚蒨」。樹珠詩「蒨雨晚蒨」。蒨水、則一。蒨菱。
 【蒨末】シン、うきくさの上。宋玉、風賦「夫風生于地、起于青蘋之末」。陸贄賦「桂華不定、多因一之風」。蒨(吉林志)蒨藤。
 【蒨】シン、
 一蒨は菌類の一、わが椎茸に似たり、多く吉林に産す、而して寧古塔の産を以て美味とす(吉林志)蒨藤。
 【蒨】ライ、
 ○かけになる、おほふ(蒨)〇くさよもぎ、蒨の屬。
 【蒨】ラウ、
 かわかしたる梅實。
 【蒨】リン、
 ○る、荒の風、水田に生ずる

草、葉は線狀を爲す、織りて席と爲す。心草。〇姓、一相如は戦國の時の趙の上卿。〇石は城上の雷石、人に投すべきもの。漢書、龜錯傳「具一石」。
 【蒨】レキ、
 蒨一はいぬなづな、形芹に似て味はわさびに似たり、食用とす。

【蒨花】シン、あしのはな。江總詩「霜外白、楓葉水前丹」。
 【蒨灰】シン、あしのはひ。淮南子、女媧積一、以止淫水」。
 【蒨花之絮】シン、あしの穂のわたの如きもの。孝子傳「関子雲、事親孝、後母生三子、衣三絮、衣絮以二」。
 【蒨管】シン、あしの葉を巻きたるふえ。李益詩「不知何處吹一、一夜征人盡望鄉」。蒨笛、胡笛。
 【蒨洲】シン、あしのあるす。張九齡詩「別筵鋪柳岸、征棹入一」。
 【蒨菰】シン、あしかび、あしの根に生ずる符に似たるもの。張籍詩「南塘水深一齊」。蒨雞、鴈。
 【蒨雞】シン、あしのためえ、尖りて雞に似る故。元稹詩「冰消田地一短、春入一校條」。蒨乳石、鴈牙。
 【蒨雪】シン、あしの穂の雪の如く白きをいふ。王良臣詩「風雁飛來更滿灘、一枝一印一波心」。
 【蒨中人】シン、あしの中の人。吳越春秋「伍子胥奔吳、至一江、漁父渡之、見子胥有肌色、曰、爲子取一、子胥乃潛身深葦中、有頃父來、呼之曰、一、豈非三窮士一乎」。
 【蒨汀】シン、あしが生えたるみぎは。周楠詩「蒨落一、月未生」。蒨落。
 【蒨秋】シン、あしと、をさと。司空曙詩

「一湘江水、蒨蒿萬里秋」。
 【蒨笛】シン、あしぶえ。袁桷詩「我郎南來得一小、一聲吹一、胡茄」。
 【蒨】シン、あしに一、編みしかき。陸游詩「一、荳月臥、衰翁」。
 【蒨】シン、だいこん。蒨菊。一説に蒨の根。
 【蒨】シン、
 〇いぬたで、おほけたで(馬蒨)〇草木のしけりおほふ貌「蒨」一、葦はあつまれる貌。
 【蒨】シン、
 龍耳。葉集れる貌。司馬相如、大人賦「攬羅列葉、叢以一」。
 【蒨】シン、あつまりあふ。淮南、叔眞「葉紛一、注一、衆會也」。

【蒨】ア、
 一蒨はえびづる、のぶだう、野生の蔓草、葡萄の一種、實は小にして酸味を帯ぶ(本草) 〇蒨舌山葡萄野葡萄。
 【蒨】キ、
 はな(花)華が榮える「花」
 「紅一、珍一、落一」。

〇あし、よし、葦の未だ秀でざる者「岸」一、碧一、蒲一、〇一、蒨はだいこん。蒨菊、葉服。〇蒨はふくへ(蒨)〇一、蒨は藥草の一、葦(艸部十三畫)を見よ。
 【蒨】シン、
 〇あし、常建詩「夜寒宿一、晚色明一、兩林」。蒨、
 蘇詩「蒨滿地一、短、正是河豚欲上時」。蒨雞。
 【蒨岸】シン、あしを生えたるきし。杜牧詩「鴈影侵一、湖痕在二、竹扉」。蒨雁。あしを洲に下れるかり。陳造詩「聞道崔公作一、端如莊叟玩一、鴈魚」。

【蒨】シン、
 〇あし、よし、葦の未だ秀でざる者「岸」一、碧一、蒲一、〇一、蒨はだいこん。蒨菊、葉服。〇蒨はふくへ(蒨)〇一、蒨は藥草の一、葦(艸部十三畫)を見よ。
 【蒨】シン、
 〇あし、常建詩「夜寒宿一、晚色明一、兩林」。蒨、
 蘇詩「蒨滿地一、短、正是河豚欲上時」。蒨雞。
 【蒨岸】シン、あしを生えたるきし。杜牧詩「鴈影侵一、湖痕在二、竹扉」。蒨雁。あしを洲に下れるかり。陳造詩「聞道崔公作一、端如莊叟玩一、鴈魚」。

【蒨】ア、
 一蒨はえびづる、のぶだう、野生の蔓草、葡萄の一種、實は小にして酸味を帯ぶ(本草) 〇蒨舌山葡萄野葡萄。
 【蒨】キ、
 はな(花)華が榮える「花」
 「紅一、珍一、落一」。

【蒨】キ、
 〇一蒨は形ある貌。又、自得の貌。〇一蒨は驚く貌。蒨然。〇一蒨ははたや。蒨、天運、仁義先王之蒨也、止可。以一宿而下。以久處。蒨舍。〇一蒨はなでし。蒨麥。
 【蒨】シン、
 〇一蒨は形ある貌。又、自得の貌。〇一蒨は驚く貌。蒨然。〇一蒨ははたや。蒨、天運、仁義先王之蒨也、止可。以一宿而下。以久處。蒨舍。〇一蒨はなでし。蒨麥。
 【蒨】シン、
 〇一蒨は形ある貌。又、自得の貌。〇一蒨は驚く貌。蒨然。〇一蒨ははたや。蒨、天運、仁義先王之蒨也、止可。以一宿而下。以久處。蒨舍。〇一蒨はなでし。蒨麥。
 【蒨】シン、
 〇一蒨は形ある貌。又、自得の貌。〇一蒨は驚く貌。蒨然。〇一蒨ははたや。蒨、天運、仁義先王之蒨也、止可。以一宿而下。以久處。蒨舍。〇一蒨はなでし。蒨麥。

【蒨】ア、
 一蒨はえびづる、のぶだう、野生の蔓草、葡萄の一種、實は小にして酸味を帯ぶ(本草) 〇蒨舌山葡萄野葡萄。
 【蒨】キ、
 はな(花)華が榮える「花」
 「紅一、珍一、落一」。

【蒨】ア、
 一蒨はえびづる、のぶだう、野生の蔓草、葡萄の一種、實は小にして酸味を帯ぶ(本草) 〇蒨舌山葡萄野葡萄。
 【蒨】キ、
 はな(花)華が榮える「花」
 「紅一、珍一、落一」。

【蒨】ア、
 一蒨はえびづる、のぶだう、野生の蔓草、葡萄の一種、實は小にして酸味を帯ぶ(本草) 〇蒨舌山葡萄野葡萄。
 【蒨】キ、
 はな(花)華が榮える「花」
 「紅一、珍一、落一」。

【蒨】ア、
 一蒨はえびづる、のぶだう、野生の蔓草、葡萄の一種、實は小にして酸味を帯ぶ(本草) 〇蒨舌山葡萄野葡萄。
 【蒨】キ、
 はな(花)華が榮える「花」
 「紅一、珍一、落一」。

【薊】ゲ。 薊

連はいたちぢさ、枝は蔓状を爲し、春日、黄花を著く。連翹草連子。

【薏】ハク。 薏

かぶら(蕪菁)の薏。

【薤】セン。 薤

ひたす、物を以て水に沾す、影が水にうつる。庚信賦「薤一油」

【薹】セイ。 薹

○なます。細かに切る、あへもの、種種の味を合せ調へたる料理。〇鹽つけの菜。

【薺】ビ。 薺

〇てんもんどう「薺」〇薺は川薺のなへ。古詩「上山采薺」

【薺】ラ。 薺

○つた、かぶら「女」薺「緑」〇つちのよもぎ(我薺)〇薺はすずしろ、だいこん。萊菔藪。〇海は海の藻。薺衣(ささる)をがせ。〇女薺(松蘿)林通詩「片月通薺」〇薺在三石林

【薺】ツタ。 薺

【薺】ツタ。 薺

【薺】ツタ。 薺

【薺】ツタ。 薺

【薺】ツタ。 薺

【薺】ツタ。 薺

【薺】ツタ。 薺

【薺】ツタ。 薺

○まがき、かき、かこ(薺)〇川薺のなへ。〇江薺藪。

【薺】ルキ。 薺

かぶら。〇薺。

【薺】ルキ。 薺

【薺】ルキ。 薺

【薺】ルキ。 薺

【薺】ルキ。 薺

【薺】ルキ。 薺

【薺】ルキ。 薺

【薺】ルキ。 薺

虎部

【虎】コ。 虎

〇あや、虎の皮の文マ。〇漢字構造の稱。

【虎】コ。 虎

の斑文あり、坐褥と爲すべし。〇借りて勇猛、威武、暴虐、猛惡などの意とす。史、孟嘗君傳「秦一狼之國也」〇子はおま(便器)の子の形に象りて作りし故。〇琥に通ず。〇玳瑁

【虎】コ。 虎

【虎】コ。 虎

【虎】コ。 虎

【虎】コ。 虎

【虎】コ。 虎

【虎】コ。 虎

【虎】コ。 虎

【虎】コ。 虎

【虎】コ。 虎

【虎】コ。 虎

【虎】コ。 虎

【虎】コ。 虎

【虎】コ。 虎

【虚】管子「釋實而攻」〇そら、くく、空、太、碧、蘇軾、赤壁賦「馮、御、風」〇むぎ、くら、(方位)〇いたづらに、ただに、むなし。〇うそ(偽)「邪」そら、と「言」〇地名。〇とみて、二十八宿の一、北方の星宿。〇大いなるを(大丘)古、墟に通ず。

【虚】〇むなしくあきたる地位。〇名をのりて實權の伴はざる地位。南史、茹法亮傳「守一而已」〇虚器。〇空名の義。韓愈、原道「道與虚爲一」

【虚】〇むなしくあきたる地位。〇名をのりて實權の伴はざる地位。南史、茹法亮傳「守一而已」〇虚器。〇空名の義。韓愈、原道「道與虚爲一」

【虚】〇むなしくあきたる地位。〇名をのりて實權の伴はざる地位。南史、茹法亮傳「守一而已」〇虚器。〇空名の義。韓愈、原道「道與虚爲一」

【虚】〇むなしくあきたる地位。〇名をのりて實權の伴はざる地位。南史、茹法亮傳「守一而已」〇虚器。〇空名の義。韓愈、原道「道與虚爲一」

【虚】〇むなしくあきたる地位。〇名をのりて實權の伴はざる地位。南史、茹法亮傳「守一而已」〇虚器。〇空名の義。韓愈、原道「道與虚爲一」

【虚】〇むなしくあきたる地位。〇名をのりて實權の伴はざる地位。南史、茹法亮傳「守一而已」〇虚器。〇空名の義。韓愈、原道「道與虚爲一」

【虚】〇むなしくあきたる地位。〇名をのりて實權の伴はざる地位。南史、茹法亮傳「守一而已」〇虚器。〇空名の義。韓愈、原道「道與虚爲一」

【虚】〇むなしくあきたる地位。〇名をのりて實權の伴はざる地位。南史、茹法亮傳「守一而已」〇虚器。〇空名の義。韓愈、原道「道與虚爲一」

【虚】〇むなしくあきたる地位。〇名をのりて實權の伴はざる地位。南史、茹法亮傳「守一而已」〇虚器。〇空名の義。韓愈、原道「道與虚爲一」

【虚】〇むなしくあきたる地位。〇名をのりて實權の伴はざる地位。南史、茹法亮傳「守一而已」〇虚器。〇空名の義。韓愈、原道「道與虚爲一」

【虚】〇むなしくあきたる地位。〇名をのりて實權の伴はざる地位。南史、茹法亮傳「守一而已」〇虚器。〇空名の義。韓愈、原道「道與虚爲一」

【虚】〇むなしくあきたる地位。〇名をのりて實權の伴はざる地位。南史、茹法亮傳「守一而已」〇虚器。〇空名の義。韓愈、原道「道與虚爲一」

【虚】〇むなしくあきたる地位。〇名をのりて實權の伴はざる地位。南史、茹法亮傳「守一而已」〇虚器。〇空名の義。韓愈、原道「道與虚爲一」

【虚】〇むなしくあきたる地位。〇名をのりて實權の伴はざる地位。南史、茹法亮傳「守一而已」〇虚器。〇空名の義。韓愈、原道「道與虚爲一」

【虚】〇むなしくあきたる地位。〇名をのりて實權の伴はざる地位。南史、茹法亮傳「守一而已」〇虚器。〇空名の義。韓愈、原道「道與虚爲一」

【虚】〇むなしくあきたる地位。〇名をのりて實權の伴はざる地位。南史、茹法亮傳「守一而已」〇虚器。〇空名の義。韓愈、原道「道與虚爲一」

【虚】〇むなしくあきたる地位。〇名をのりて實權の伴はざる地位。南史、茹法亮傳「守一而已」〇虚器。〇空名の義。韓愈、原道「道與虚爲一」

【虚】〇むなしくあきたる地位。〇名をのりて實權の伴はざる地位。南史、茹法亮傳「守一而已」〇虚器。〇空名の義。韓愈、原道「道與虚爲一」

【虚】〇むなしくあきたる地位。〇名をのりて實權の伴はざる地位。南史、茹法亮傳「守一而已」〇虚器。〇空名の義。韓愈、原道「道與虚爲一」

人々を害する者人・小人などに喩ふ。
子華子「銀・本妻・原・其子」
【虻】ハ雷の聲。詩「蟪蛄其陰、
蟪蛄其陰」。
【虻】ハ子生む時、虻
蛇共に陰性の蟲、故にいふ。詩小
雅「惟虻惟蛇、女子之辟」
【虻】ハ子生む時、虻
【虻】ハ子生む時、虻
【虻】ハ子生む時、虻

【虹】ハ眼珠の瞳孔をとりまき
て放散輪状に列せる筋纖維。虹
彩眼・眼膜。
【虹】ハ如く高きかけはし。
薩都刺詩「懸崖一危、插竹漁網
晒」
【虹】ハたき(瀑布)張説文「一電
射、雲水虛吟」
【虹】ハ深く遠き貌。馬融、廣成
頌「天地一川、鴻洞。〇相運る貌。
枚乘、七發「一今蒼天」
【虹】ハあしきじの氣。江淹賦
「一阻于上京、蛟虺屬于下園」

【好】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒
し、老いたる者は類白し「寒」
「春」紫「土」龍歌女曲體。
【好】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒

【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒
し、老いたる者は類白し「寒」
「春」紫「土」龍歌女曲體。
【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒

【虹】ハ日光が空中の水蒸氣
に映じて七色の橋狀を成す現
象古は龍の一種とし、雄を
「雄を蟻といふ」と「長」「晚」
〇天弓、帝弓、紅橋、彩橋、蟬、蟬。
〇日光が水蒸氣に映じて現す
白氣。戰國策「白一貫日」
橋に喩ふ。庾信詩「跨一連絕
岸」〇流彩は古の寶劍の名。
〇みだす。みだる(惑亂)詩、小
雅「實一小子」に「通ず」。

【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒
し、老いたる者は類白し「寒」
「春」紫「土」龍歌女曲體。
【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒

【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒
し、老いたる者は類白し「寒」
「春」紫「土」龍歌女曲體。
【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒

【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒
し、老いたる者は類白し「寒」
「春」紫「土」龍歌女曲體。
【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒

【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒
し、老いたる者は類白し「寒」
「春」紫「土」龍歌女曲體。
【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒

【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒
し、老いたる者は類白し「寒」
「春」紫「土」龍歌女曲體。
【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒

【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒
し、老いたる者は類白し「寒」
「春」紫「土」龍歌女曲體。
【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒

【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒
し、老いたる者は類白し「寒」
「春」紫「土」龍歌女曲體。
【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒

【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒
し、老いたる者は類白し「寒」
「春」紫「土」龍歌女曲體。
【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒

【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒
し、老いたる者は類白し「寒」
「春」紫「土」龍歌女曲體。
【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒

【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒
し、老いたる者は類白し「寒」
「春」紫「土」龍歌女曲體。
【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒

【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒
し、老いたる者は類白し「寒」
「春」紫「土」龍歌女曲體。
【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒

【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒
し、老いたる者は類白し「寒」
「春」紫「土」龍歌女曲體。
【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒

【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒
し、老いたる者は類白し「寒」
「春」紫「土」龍歌女曲體。
【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒

【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒
し、老いたる者は類白し「寒」
「春」紫「土」龍歌女曲體。
【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒

【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒
し、老いたる者は類白し「寒」
「春」紫「土」龍歌女曲體。
【蚰】ハはみみず、土中にすむ、
體圓くして細長く、色は赤黒

【蛛】 チュ 國

蜘蛛はくも、節足動物の一、蜘蛛(虫部八畫)を見よ。
【蛛絲】 チュクモのすくも、腹より分泌する細絲、杜甫詩「蟲蛇穿畫壁、風飄斷一絲」
【蛛網】 チュクモのすくも、煙塵と。楊萬里詩「只有三調仙留、句處、春風掌管」
【蛛網】 チュクモのすくも、煙塵と。楊萬里詩「只有三調仙留、句處、春風掌管」

【蛸】 マ、 國

蛸は山川木石の怪物、狀三歳の小兒の如く、赤黒色にして長耳美髪あり、好みて人の聲をまねて人を惑はすといふ。すだま、魯語「木石之怪、曰蛸」蛸、張衡、南都賦「追水約分、蛸、蛸、兩、魁、魁、山精」

【蚌】 ボ、 國

蚌はかざめ、かざめ、蟹に似て大なるもの。蛸(虫部九畫)を見よ。○かまきり、蝗娘。

【蛭】 エ、 國

たわむ(鏡)屈曲する。ふるふ(掉)○ほうふり(子子)蚊の幼蟲。○一は蠅の動く貌。○屋中の深廣なるにいふ。○人名。○うるはし、便一娟に通ず。

【蛭】 エ、 國

蛭はけちけち、蛸(虫部五畫)を見よ。○うねうねと長し「蛸」楚辭、大招「蛸蛇一尺」只是助字。

【蛾】 エ、 國

かひこのて、蠶の蛹の羽化せしもの、黄蝶に似て、其の眉は曲りて畫の如し「蠶」○ひとりとむしの類「燈」○飛一○かひこのての觸鬚に似たる美くしき眉「一眉」○にはかに。漢書、外戚傳「而大幸」注「俄古字通用」

【蛸】 マ、 國

蛸は、むかで。一蜈蚣。○むさび、一蛸。

【蛸】 マ、 國

蛸はあしたかぐも。蛸(虫部十六畫)を見よ。○蛸一蛸はいか(烏賊)の一種。又、かまきりのたまご、おぼぢがふぐり。○蛸た(章魚)海中に産する軟體動物の一。一蛸。

【蛸】 マ、 國

おほはまぐり(大蛤)一蛸。○蛸の一種、赤き蟹ありて腰部以下の觸鬚が逆立す、氣を吐けば海市を現すとす。

【蛸】 マ、 國

はまぐり。大を蛸といひ、小を蛤といふ。遠東記、黃雀秋化爲蛤、春復爲黃雀、五百年爲一。○蛸、光線と水蒸氣との關係にて海邊又は沙漠の空に山川城郭等の現出する現象(舊説、蛸の氣を吐くに由ると爲す、字解參看漢書、天文志、海旁氣象、積雲)一蛸、海市、前條に同じ。

【蛸】 マ、 國

蛸は、ひきがへる、蛙類の大なるもの。○月の異名。月中にひきがへるが居るといふ古傳説による。蛸(虫部十三畫)を見よ。

【蛸】 マ、 國

蛸は、ひきがへる、蛙類の大なるもの。○月の異名。月中にひきがへるが居るといふ古傳説による。蛸(虫部十三畫)を見よ。

【蛸】 マ、 國

蛸は、ひきがへる、蛙類の大なるもの。○月の異名。月中にひきがへるが居るといふ古傳説による。蛸(虫部十三畫)を見よ。

【蛸】 マ、 國

蛸は、ひきがへる、蛙類の大なるもの。○月の異名。月中にひきがへるが居るといふ古傳説による。蛸(虫部十三畫)を見よ。

【蛸】 マ、 國

蛸は、ひきがへる、蛙類の大なるもの。○月の異名。月中にひきがへるが居るといふ古傳説による。蛸(虫部十三畫)を見よ。

【蛸】 マ、 國

蛸は、ひきがへる、蛙類の大なるもの。○月の異名。月中にひきがへるが居るといふ古傳説による。蛸(虫部十三畫)を見よ。

【蛸】 マ、 國

蛸は、ひきがへる、蛙類の大なるもの。○月の異名。月中にひきがへるが居るといふ古傳説による。蛸(虫部十三畫)を見よ。

【蛸】 マ、 國

蛸は、ひきがへる、蛙類の大なるもの。○月の異名。月中にひきがへるが居るといふ古傳説による。蛸(虫部十三畫)を見よ。

【蛸】 マ、 國

蛸は、ひきがへる、蛙類の大なるもの。○月の異名。月中にひきがへるが居るといふ古傳説による。蛸(虫部十三畫)を見よ。

【蛸】 マ、 國

蛸は、ひきがへる、蛙類の大なるもの。○月の異名。月中にひきがへるが居るといふ古傳説による。蛸(虫部十三畫)を見よ。

【蛸】 マ、 國

蛸は、ひきがへる、蛙類の大なるもの。○月の異名。月中にひきがへるが居るといふ古傳説による。蛸(虫部十三畫)を見よ。

【蛸】 マ、 國

蛸は、ひきがへる、蛙類の大なるもの。○月の異名。月中にひきがへるが居るといふ古傳説による。蛸(虫部十三畫)を見よ。

【蛸】 マ、 國

蛸は、ひきがへる、蛙類の大なるもの。○月の異名。月中にひきがへるが居るといふ古傳説による。蛸(虫部十三畫)を見よ。

【蛸】 マ、 國

蛸は、ひきがへる、蛙類の大なるもの。○月の異名。月中にひきがへるが居るといふ古傳説による。蛸(虫部十三畫)を見よ。

【蛸】 マ、 國

蛸は、ひきがへる、蛙類の大なるもの。○月の異名。月中にひきがへるが居るといふ古傳説による。蛸(虫部十三畫)を見よ。

【蛸】 マ、 國

蛸は、ひきがへる、蛙類の大なるもの。○月の異名。月中にひきがへるが居るといふ古傳説による。蛸(虫部十三畫)を見よ。

【蛸】 マ、 國

蛸は、ひきがへる、蛙類の大なるもの。○月の異名。月中にひきがへるが居るといふ古傳説による。蛸(虫部十三畫)を見よ。

【蛸】 マ、 國

蛸は、ひきがへる、蛙類の大なるもの。○月の異名。月中にひきがへるが居るといふ古傳説による。蛸(虫部十三畫)を見よ。

【蜆】シラ 杜鵑の異名。蜀の布。漢書、張騫傳、臣在二大夏時、見芎竹杖。一、

【蛻】ゼイ 蛇、蟬などの解き脱せし外皮。蟬類が外皮を脱ぐ。史、屈原傳「蟬一于濁穢」

【蟻】マン 又、蟻。南方の蠻族、舟中に住み、又、水に没して其珠貝其他の海産物を取るを業とす。桂海虞衡志、○國あま(海人)の家。

【蟻】マン 又、蟻。南方の蠻族の乗るふね。元史、安南傳、市、一、百斛者千艘。一、

【蟻】マン 又、蟻。南方の蠻族の乗るふね。元史、安南傳、市、一、百斛者千艘。一、

【蟻】マン 又、蟻。南方の蠻族の乗るふね。元史、安南傳、市、一、百斛者千艘。一、

【蟻】マン 又、蟻。南方の蠻族の乗るふね。元史、安南傳、市、一、百斛者千艘。一、

【蟻】マン 又、蟻。南方の蠻族の乗るふね。元史、安南傳、市、一、百斛者千艘。一、

【蟻】マン 又、蟻。南方の蠻族の乗るふね。元史、安南傳、市、一、百斛者千艘。一、

【蟻】マン 又、蟻。南方の蠻族の乗るふね。元史、安南傳、市、一、百斛者千艘。一、

【蟻】マン 又、蟻。南方の蠻族の乗るふね。元史、安南傳、市、一、百斛者千艘。一、

【蟻】マン 又、蟻。南方の蠻族の乗るふね。元史、安南傳、市、一、百斛者千艘。一、

【蟻】マン 又、蟻。南方の蠻族の乗るふね。元史、安南傳、市、一、百斛者千艘。一、

【蛻】ゼイ 蛇、蟬などの解き脱せし外皮。蟬類が外皮を脱ぐ。史、屈原傳「蟬一于濁穢」

【蟻】マン 又、蟻。南方の蠻族の乗るふね。元史、安南傳、市、一、百斛者千艘。一、

【蟻】マン 又、蟻。南方の蠻族の乗るふね。元史、安南傳、市、一、百斛者千艘。一、

【蟻】マン 又、蟻。南方の蠻族の乗るふね。元史、安南傳、市、一、百斛者千艘。一、

【蛻】ゼイ 蛇、蟬などの解き脱せし外皮。蟬類が外皮を脱ぐ。史、屈原傳「蟬一于濁穢」

【蟻】マン 又、蟻。南方の蠻族の乗るふね。元史、安南傳、市、一、百斛者千艘。一、

【蟻】マン 又、蟻。南方の蠻族の乗るふね。元史、安南傳、市、一、百斛者千艘。一、

【蟻】マン 又、蟻。南方の蠻族の乗るふね。元史、安南傳、市、一、百斛者千艘。一、

【蟻龍】ワ。角なき龍。蟻雅。無角曰蟻。

【執虫】チツ。通音。○かくる(藏)蟲類が土中などにかくれる。易。繫辭。龍蛇之。以存身也。轉じてとちこもる。外出せぬ。○しづか(靜)○。一は和氣集まる貌。○啓。一は二十四節の一。春分の前。即ち三月六日頃。

【蟻居】ワ。○こもりを。かくれを。○國德川時代。士人の刑。一室に幽して外出せしめざるをいふ。【蟻藏】ワ。あなごもり。淮南子。熊羆一。飛鳥時移。【蟻獸】ワ。熊羆などのふゆごもりするもの。周禮。掌。攻。一。各以三。其物。火。之。以時獻。其珍異皮革。上。南。宜。爾子孫。一。今。傳。一。和。集也。一。説に多き貌。○靜かなる貌。莊。天地。一。始作。吾驚。之。以。二。雷。一。

【蟻蟻】ワ。ふゆごもりせるむし。禮。月令。孟春之月(中略)。一。始振。【蟻伏】ワ。蟻などが土中に冬籠りする。又。こもりを。淮南子。秋三月。地氣下凝。百蟲一。【蟻雷】ワ。つがみなり。春雷の始めて聲を發するもの。聲を發して蟻を驚かす。

【蟻】ワ。蟲を啓く義。杜荀鶴詩。和。三。若。句。吟。聲。大。蟻。多。聞。之。謂。一。一。【蟻龍】ワ。○かくれを。り。【蟻爭】ワ。○轉じて未だ時を得ざる英雄に喩ふ。伏龍。

【蟻】ワ。一。蟻ははじ(虹)の別名。蟻(虫部八畫)を見よ。

【蟻】ワ。一。蟻はひきがへる。蟻(虫部九畫)を見よ。

【蟻】ワ。蟻(前條)と同じ。

【蟻】ワ。蚊(虫部四畫)の古字。か。漢書。中山靖王傳。聚。一。成。雷。【蟻首】ワ。蚊のくび。微細に喩ふ。淮南子。權。重。重。不。差。一。一。【蟻】ワ。一。蟻は蟻(前條)のたまご。おほががふぐり。

【蟻】ワ。蟻(虫部九畫)と同じ。

【蟻】ワ。月中生存し。春秋を知らず。以て生命の極めて短きに喩ふ。莊。逍遙遊。朝菌不知晦朔。一。蟻一。通。一。に。作。の。一。蟻。蟻。【蟻】ワ。蟻(前條)なつせみのなきごと。王維詩。夜。夜。蟻。蟻。一。悠。悠。一。

【蟻】ワ。○天。一。は龍のわだかまる貌。魯靈光殿賦。旁。天。一。以。横。出。一。又。類に伸びる貌。漢書。司馬相如傳。天。一。支。格。一。○牛は人名。舜の祖父。

【蟻】ワ。申培詩説。一。斯美。周室。多。男。之。詩。一。蟻。蟻。【蟻】ワ。一。蟻ははげむし。蟻(虫部五畫)を見よ。

【蟻】ワ。一。蟻ははげむし。蟻(虫部五畫)を見よ。

○にし、貝類の殻に左巻の渦をなせるものの總稱。田。一。【蟻】ワ。一。蟻ははげむし。蟻(虫部五畫)を見よ。

【蟻】ワ。一。蟻ははげむし。蟻(虫部五畫)を見よ。

【蟻】ワ。一。蟻ははげむし。蟻(虫部五畫)を見よ。

【蟻】ワ。一。蟻ははげむし。蟻(虫部五畫)を見よ。

【蟻】ワ。一。蟻ははげむし。蟻(虫部五畫)を見よ。

【蟻】ワ。一。蟻ははげむし。蟻(虫部五畫)を見よ。

【蟻】ワ。一。蟻ははげむし。蟻(虫部五畫)を見よ。

【蟻】ワ。一。蟻ははげむし。蟻(虫部五畫)を見よ。

【蟻】ワ。一。蟻ははげむし。蟻(虫部五畫)を見よ。

【蟻】ワ。一。蟻ははげむし。蟻(虫部五畫)を見よ。

【蟻】ワ。一。蟻ははげむし。蟻(虫部五畫)を見よ。

【蟻】ワ。一。蟻ははげむし。蟻(虫部五畫)を見よ。

【蟻】ワ。一。蟻ははげむし。蟻(虫部五畫)を見よ。

【蟻】ワ。一。蟻ははげむし。蟻(虫部五畫)を見よ。

【蟻】ワ。一。蟻ははげむし。蟻(虫部五畫)を見よ。

【蟻】ワ。一。蟻ははげむし。蟻(虫部五畫)を見よ。

【蟻】ワ。一。蟻ははげむし。蟻(虫部五畫)を見よ。

【蟻】ワ。一。蟻ははげむし。蟻(虫部五畫)を見よ。

【蟬】せみがやましく鳴く。王
 維詩「林逾靜、鳥鳴山更幽」
 【蟬】せみや、かひこの形せる香の
 名。名香詩「香交趾所、賈唐宮
 中呼爲「瑞龍腦」」
 【蟬】冠の飾。古、侍臣の冠の飾
 に似て、とを加ふ。南史、朱異傳
 「異除中書郎時、秋、始拜、有飛
 蟬、正集、昇武冠上、時成謂「蟬」之
 先、稱じて近侍の臣の儀。北齊書、
 趙郡王叡傳、進居「蟬」之榮、退當
 委要之職、
 【蟬】せみのこゑ。隋煬帝時、
 渡山氣冷、風急、蟬哀、
 【蟬】せみの皮を脱する如く、舊
 習を脱する。王維詩「涼樹沸「
 蟬」」
 【蟬】せみのはねの如くにすき
 通りて見ゆるかみ。女の髪的美く
 しきに喩ふ。古今注「魏文帝宮人美
 髮、始製爲「蟬」之髮、
 【蟬】せみの加。意梳、
 【蟬】せみの冠。同。齊書、東吳之
 傳、風範和順、爲「蟬」所、更有「

【蝨】せみのはね。極めて軽きも
 のに喩ふ。晉書、周顛傳「質輕「
 一、事重三千鈞」
 【蝨】せみの羽。蟬翅。
 【蝨】せみのつらなりつづく。陸龜蒙
 詩「是時春三月、繞花「
 とはがつづきて絶えぬ。晉書、王濬
 傳「與阿大語、蟬連不得、
 聯通す。

【虫】

○むし「草」「羽」「夏」
 動物の總稱。羽(鳥)の長は
 鳳凰、毛(獸)の長は麒麟、甲
 の長は龜、鱗の長は龍、裸
 の長は人(大戴禮、易本命)人
 と禽獸介介を除きし他の動物
 「禽獸一魚」足ある動物の總
 稱。足なきを蟲といふの對。爾
 雅、釋蟲「有足謂之「
 是は雄の異名(書、益稷)「
 一は熱き貌、むしあつし。
 【蟲】むしとありと、蟻は蟻に
 通す。史、五帝紀「時播百穀、草木
 淳化、鳥獸一
 【蟲】むしと、うをと。金史、樂
 志「成慶、退還、化漸「
 志「成慶、退還、化漸「

の動物までも感化を被る(蟻)
 【蟲】むしと、しと。農作の害
 を爲すもの。資暇錄「蟲傷宜爲「
 一、望百農水旱之外、抑有「
 損、此四者田農之大害」
 【蟲】死して葬らず、うじむし
 の出るをいふ。漢書、陳萬年傳「自
 絞死者、數數百千人、久者「
 【蟲】秦の八體書の一、蟲の形
 をなして蟻に書するに用ふ
 【漢書注】鳥蟲書。
 【蟲】むしと、秋陽修、秋聲
 賦「但聞四壁「
 【蟲】うじむし。李存詩「唯聽播
 種生「
 【蟲】むし、へび。晉書、索靖傳
 「草書之爲「
 【蟲】むしと、足なき
 蟲。民蟲の總稱。吳志、薛綜傳、日南
 郡男女裸體、不以爲羞、由、此言
 辭。五代史、盧程傳「爾何「
 【蟲】熱氣甚だしき貌。詩、大雅
 「早既大甚、
 【蟲】家書の一體、蟲のはひま
 つはる如し、故にいふ。讀書譜「
 行草書之法、其源出「
 飛白、草書等「

【蟻】昆蟲の媒介により
 て、種子を生ずる植物、油菜、蒲公英
 英の類。風蝶花の對。
 【蟻】昆蟲のひびと鼠のきも
 と。萬物賦形の微細をいふ。莊、大
 宗師「以汝爲「
 泉肝乎、謝枋得文「爲、
 與、往來、
 【蟻】むしかと。鶴林玉露「取
 草蟲、
 【蟻】ハ、
 ○うはばみ、をろち、蛇の最も
 大いなるもの「巨」
 王蛇。蟻に通ず、蛇の屬、
 【蟻】ハ、
 ○わらじむし(草鞋蟲)鼠負。
 伊威。○わだかまる。○ふす
 (伏)かむ(屈)○めぐる(周)
 ○大いなり。
 【蟻】わだかまりらねる。徐陵賦
 「左則背龍「
 【蟻】わだかまされる。蘇軾
 詩「下有千蟻「
 【蟻】わだかまりらねる。蘇軾
 詩「下有千蟻「

【蟻】わだかまりらねる。蘇軾
 詩「下有千蟻「
 【蟻】わだかまされる。蘇軾
 詩「下有千蟻「

【蟻】わだかまされる。蘇軾
 詩「下有千蟻「

【蟻】わだかまされる。蘇軾
 詩「下有千蟻「

【蟻】わだかまされる。蘇軾
 詩「下有千蟻「

【蟻】わだかまされる。蘇軾
 詩「下有千蟻「

【蟻】わだかまされる。蘇軾
 詩「下有千蟻「

【蟻】わだかまされる。蘇軾
 詩「下有千蟻「

【蟻】わだかまされる。蘇軾
 詩「下有千蟻「

【蟻】わだかまされる。蘇軾
 詩「下有千蟻「

【蟻】わだかまされる。蘇軾
 詩「下有千蟻「

【蟻】わだかまされる。蘇軾
 詩「下有千蟻「

【蟻】わだかまされる。蘇軾
 詩「下有千蟻「

【蠹】

ジヤウ

蠹

【蠹】

ケイ

蠹

【蠹】

ホウ

蠹

【蠹】

ホウ

蠹

○はち、蜂(虫部七畫)に同じ。説文「飛蟲螫人者」熱語は蜂を参看せよ。○はち、蜂に通ず。漢書「韓王信傳」其東向、可以爭天下。註「蜂、蜂同」。

○かひこ、長さ二寸許、灰色、十餘の環節あり、數次皮をぬぐ蟲の名、桑葉を食ひ絲を吐き繭を作り、蛹となり、後、化して蛾となる。繭を絹の原料とする。○巧娘馬頭娘。○野、は山野に自生するかひこ。後漢書「光武紀」野、成繭(野の絲にて織りたる帛を繭縞と云ふ。山東、直隸等より多産す)。○原、はなつ。桑の晩葉を以て養ふかひこ。○再蠶。○かひこ、蠶を養ふ「農耕」。

【蠹】サ 幼きかひこ。廣東新語「蠹首類」馬、故曰蠹。【蠹】ケイ 蠹宮に同じ。曹植「下太后詠」親蠹、一、爲天下式。【蠹】ホウ 詩「幽風」一、條桑。蠶桑。【蠹】サ 此蠶生、自一、成於後漢書。【蠹】ケイ 此蠶生、自一、成於後漢書。【蠹】ホウ 此蠶生、自一、成於後漢書。

【蠹】サ 幼きかひこ。廣東新語「蠹首類」馬、故曰蠹。【蠹】ケイ 蠹宮に同じ。曹植「下太后詠」親蠹、一、爲天下式。【蠹】ホウ 詩「幽風」一、條桑。蠶桑。【蠹】サ 此蠶生、自一、成於後漢書。

【蠹】

ホウ

蠹

【蠹】

ホウ

蠹

其上、以告姜氏、姜氏殺之。齊民要術「三月清明節、令蠹治蠶室、蠹中除穴」。蠹、古の蜀王の名(揚雄、蜀王本紀)成都記「一、氏、蜀君也」轉じて蜀の異名とす。李白詩「見說一、路、崎嶇不易行」。

【蠹】サ 幼きかひこ。廣東新語「蠹首類」馬、故曰蠹。【蠹】ケイ 蠹宮に同じ。曹植「下太后詠」親蠹、一、爲天下式。【蠹】ホウ 詩「幽風」一、條桑。蠶桑。【蠹】サ 此蠶生、自一、成於後漢書。

【蠹】サ 幼きかひこ。廣東新語「蠹首類」馬、故曰蠹。【蠹】ケイ 蠹宮に同じ。曹植「下太后詠」親蠹、一、爲天下式。【蠹】ホウ 詩「幽風」一、條桑。蠶桑。【蠹】サ 此蠶生、自一、成於後漢書。

【蠹】サ 幼きかひこ。廣東新語「蠹首類」馬、故曰蠹。【蠹】ケイ 蠹宮に同じ。曹植「下太后詠」親蠹、一、爲天下式。【蠹】ホウ 詩「幽風」一、條桑。蠶桑。【蠹】サ 此蠶生、自一、成於後漢書。

【蠹】

ホウ

蠹

【蠹】

ホウ

蠹

【蠹】

ホウ

蠹

其上、以告姜氏、姜氏殺之。齊民要術「三月清明節、令蠹治蠶室、蠹中除穴」。蠹、古の蜀王の名(揚雄、蜀王本紀)成都記「一、氏、蜀君也」轉じて蜀の異名とす。李白詩「見說一、路、崎嶇不易行」。

【蠹】サ 幼きかひこ。廣東新語「蠹首類」馬、故曰蠹。【蠹】ケイ 蠹宮に同じ。曹植「下太后詠」親蠹、一、爲天下式。【蠹】ホウ 詩「幽風」一、條桑。蠶桑。【蠹】サ 此蠶生、自一、成於後漢書。

【蠹】サ 幼きかひこ。廣東新語「蠹首類」馬、故曰蠹。【蠹】ケイ 蠹宮に同じ。曹植「下太后詠」親蠹、一、爲天下式。【蠹】ホウ 詩「幽風」一、條桑。蠶桑。【蠹】サ 此蠶生、自一、成於後漢書。

【蠹】サ 幼きかひこ。廣東新語「蠹首類」馬、故曰蠹。【蠹】ケイ 蠹宮に同じ。曹植「下太后詠」親蠹、一、爲天下式。【蠹】ホウ 詩「幽風」一、條桑。蠶桑。【蠹】サ 此蠶生、自一、成於後漢書。

【變】反賊可謂「反手」
 【變】外國の大船。五國故事、仍歳豐年、毎發二一、無失墜者、人因謂之「招財待耶」
 【變】えびす、蝦は北方のえびす。論、徳靈公言思信、行篤敬、雖二一之邦一行矣、南蠻北狄。
 【變】えびすのならばし。二變俗。○賤しき風俗。
 【變】文化がひらけず。二野蠻。
 【變】國風なる勇氣。
 【變】魏明帝、善哉行、我祖我征、伐彼二一。
 【變】えびすの地より徵發する入夫、柳宗元、嶺南節度使軍堂記「則一是微」

二十畫

【蠖】カク
 おぼざる(母猴)「一様」

血部

【血】ケツ
 ○ち、ちしほ、のり、心臓より出でて体内の脈管に循環する赤き液體「液」○そむ(染)○うれふ(色)○らぬ(血)を塗

りつける「刃」○血を分けたる間柄「統」○族「胤」○あかね(地血)○茜○強く盛んにしていきいきしたるにいふ「氣」熱「食」は性「殺し」を取りて神を祀る。
 【血胤】血統に同じ。胤は血つづき。
 【血液】ちしる、動物の体内に満ちて、營養をつかさどる液。
 【血行】体内に於ける血液の循環。
 【血器】心臓と血管と。
 【血氣】はやりぎ。論述而「少之時一未定、戒之在色」
 【血球】血液の成分、赤血球と白血球とあり。二血輪。
 【血塊】固食血症。
 【血塊】ちのかたまり。
 【血管】体内の血の通ふくだ。二脈管。
 【血脈】ちのつきたるあと。棠陰比事、藤三去其墨、即見二一。
 【血祭】いけにへを殺し血を取ってまつ。周禮、春官、以二一祭社稷五祀五嶽。二國、出陣の時、いけにへを殺して軍神を祭る。又、其の敵とする者を殺して見せしめにする。
 【血相】かほいろ、顔色。二血色。
 【血刃】刀の刃に刺みたる細きみぞ。ちながし。

【血記】いけにへをそなへてまつる。舊唐書、君人者、常宜二一、況自有二其臣乎。二血食。
 【血嗣】ちすぢ。後漢書、張綱傳、去順效逆、非忠也、身絶二一、非孝也。註、凡祭皆用牲、故曰二一。二血統・血胤。
 【血晶】水晶の赤くして血の如きもの、珍貴にして得易からず。
 【血液】濃くして透明なる水様液。血液の成分をなすもの。
 【血書】ちにて書く。又、其の文字。
 【血色】ちのいろ。○かほいろ。二血相。○赤色。白居易詩、二一羅裙翻酒汚。
 【血食】毛血ある性をすすめて神を祭る。左、莊、六、抑社稷實不二一。君焉取餘(不血食)は國の亡ぶる(義)。
 【不血食】國の亡ぶるをいふ。前後參看。
 【血清】血液より析出する帶黄色の澄める液。
 【血稅】國徴兵の職務をいふ。
 【血脈】ちなまがし。
 【血戰】ちなまみれになりてたかふ、身命をなげうちて劇烈に戦ふ。五代史、張承業傳、大王父子、與梁一三十年、本欲雪二家國之仇、而復唐之社稷。
 【血族】同じ先祖より出でたる親類。二血胤。

【血腸】血をわけたる親族。申夢錄「某山門有瘞、一在焉」二血族。
 【血點】ちの滴りたるあと。臨游詩「袖中出劍秋水流、一斑斑新報仇」
 【血統】血をわけたるつづきあひ。二血緣・血胤。
 【血肉】ちとくと。蘇舜欽詩、況我有二一、又生名利區」
 【血珀】琥珀の深紅色のもの。
 【血脈】血液の通ふ脈管。呂覽、一欲其通也、筋骨欲二其固也。二血管。○ちすぢ。梁書、劉杳傳「訪二一、所因」○二佛法の奧義を傳へる義。二法脈・傳統。
 【血脈貫通】ちの身に血液が通ずる如く文章などの一篇の連絡あるに譬ふ。大學蒙引、一者、人之四肢百骸、雖各爲二一、體、然惟血與脈、則實相貫通」
 【血痢】血便をくだす傳染病。二赤痢。
 【血淋】淋病の尿に血液を含むもの。
 【血輪】血液に同じ。
 【血脈】ちのなみだ。白居易文「極二言是非、一盈瀦」
 【血路】敵の國を切りぬけてやつと逃げ出づるみち。韓愈、城南聯句「羽空懸二、一進二孤」
 【血】ち。戰場に赴くをいふ。梁は遂に進ず、腹なり。戰場のはけ

しきさま。史、淮陰侯傳「新二一關與二(關與は地名)」

【以血洗血】血にて血を洗はば益けがる。惡事を處分する爲めに更に惡を爲すに喩ふ。唐書、源休傳、汝國已殺二突董等、吾又殺汝、猶二以血洗血、汚益甚爾。○血を分けたる親類が互に相争ふに喩ふ。
 【血洗源幹】源幹は戰死者多く、流血の盛んなるをいふ。書、武成「前徒倒戈、攻于後」以北、一」

【益】カ、カ
 ち(血)左、倍十五「士封、羊亦無一也」(羊をさき殺して血の出ざるは不吉の兆)

【郵】シ
 郵(二八三三)の誤字。
 【四】
 【四】

【蛆】ヂク
 ○はなぢ、鼻の穴の粘膜より出る血。又、はなぢが出る。○くじく(挫)「挫」「沮」「折」○やぶる(敗北)「敗」「奔」曹植、求自試表「師徒小」
 【血血】はなぢ(鼻血)二蛆。

【蚌】シ
 蚌(前條)の俗字。

【蚌】シ
 蚌(前條)の俗字。

【蚌】シ
 蚌(前條)の俗字。

【蚌】シ
 蚌(前條)の俗字。

【蚌】シ
 蚌(前條)の俗字。

【蚌】シ
 蚌(前條)の俗字。

【蚌】シ
 蚌(前條)の俗字。

【蚌】シ
 蚌(前條)の俗字。

【蚌】シ
 蚌(前條)の俗字。

【蚌】シ
 蚌(前條)の俗字。

【蚌】シ
 蚌(前條)の俗字。

九 書

【略】カク 俗に略る

〇はく(嘔)血を吐く。〇略。〇氣を吐く。〇叱る貌。

十五 書

【蟻】ベツ 俗に略る

〇けがれたるち、汚血。〇けがす。けがれる(汚)〇はづかしめる。恥をかかす(汚)〇は(なり)鼻血

十八 書

【畫】キョク 職

いたむ(傷)痛書、酒誥、民罔不(傷)心

行 部

【行】カク、ギョウ、カク、ギョウ、カク、ギョウ

〇ゆく(往)あゆむ(歩)説文

「人之歩趨也」すすむ(前進)いたる(臻)〇かへる(還)さる(去)去りて他にゆく。〇ながる(流)うつる(移)めぐる(周)ふる(歴)経「一年」〇山の名。〇おこなふ、なす。論、爲政「先」其言「なする(爲)〇ほどこす(施)〇やる、ゆかす。〇官名「人」〇もろし、堅からず。〇たび、たびち(旅程)たびじた、かどで。〇姓。〇まづ(先)〇しばらく(且)〇やがて、ついで。〇みち(道路)詩經「有」死人「又義理。〇路の神。禮、月令「孟冬其祀」〇ぎやう、書體の一種、楷書を少しくくづしたるもの「書」眞「草」〇詩の一體「歌」「琵琶」短歌「漢書、司馬相如傳、爲鼓一再」〇ゆくゆく。〇天地萬物成立の元氣、五「は水、火、木、金、土。〇外に在る義「一幸」位が高職が卑きことをあらはす、唐代の制。我國にても倣ひ用ふ。守の對。〇年齢の次第「輩」排「〇ともがら(等輩)文人」〇一は剛健なる貌。〇くだり、ならび、つ

ら、なみ(隊列)排列「一列」一札十一「涙數」〇古代の兵制、二十五人一組の稱。左、隱十一「出犬難」〇とひや(問)屋、貨物を積みて賣買の紹介を爲すもの「棧」〇百工の執る所の業、同業を同一といふ。〇太一は山名、其の脈、山西、河南兩省に連る。〇しわざ、おこなひ、ふるまひ(德行)行爲所業(心)に在るを徳といひ、之を施すを「と」いふ。〇隨身を潔くして佛に奉ずるを修「と」いふ「難」「苦」

【行】カク、ギョウ、カク、ギョウ、カク、ギョウ

〇ゆく(往)あゆむ(歩)説文

【畫】キョク 職

〇ゆく(往)あゆむ(歩)説文

【行】カク、ギョウ、カク、ギョウ、カク、ギョウ

〇ゆく(往)あゆむ(歩)説文

【畫】キョク 職

〇ゆく(往)あゆむ(歩)説文

〇ゆく(往)あゆむ(歩)説文

【行】カク、ギョウ、カク、ギョウ、カク、ギョウ

〇ゆく(往)あゆむ(歩)説文

【畫】キョク 職

〇ゆく(往)あゆむ(歩)説文

〇ゆく(往)あゆむ(歩)説文

〇ゆく(往)あゆむ(歩)説文

〇ゆく(往)あゆむ(歩)説文

〇ゆく(往)あゆむ(歩)説文

〇ゆく(往)あゆむ(歩)説文

〇ゆく(往)あゆむ(歩)説文

〇ゆく(往)あゆむ(歩)説文

〇ゆく(往)あゆむ(歩)説文

〇ゆく(往)あゆむ(歩)説文

所防の門。又、彼所、古は牙門に作る。牙兵を以て守る故。牙、衛通ず。漢唐書、張仲方傳、「一未、開、百官、立於朝堂」

九

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

〇

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

〇

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

〇

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

〇

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

〇

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

〇

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

〇

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

〇

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

〇

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

〇

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

〇

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

〇

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

〇

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

〇

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

〇

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

〇

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

〇

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

〇

【衛】衛(衛)の俗字(正字通) 【衛】衛(衛)の俗字(正字通)

【衡約】平かにひとし、衡も釣も平か、國家の公平を保つ政。又其の職【韓愈、祭馬僕射文】
 【衡權】はかりのさとを、おもりと。羣書考索「度量」皆本二於「衡」

【衡宰】宰相。後漢書、鄧熹傳、緯、

【衡山】衡山。五岳の一、湖南省一縣の西北三十支那里に在り、舜が南に巡狩して南嶽に至りしは即ちこの山。風俗通「南方一名『衡』」

岳。〇縣名。晉代に置く、宋、齊、梁、陳皆之に因る。

【衡人】戰國時代に連衡説を唱へたる策士。史記、夫一日夜以三秦權、恐兩國候、合從連衡、

【衡道】衡道。衡山と湘水と。韓愈、柳子厚墓誌銘「一以南衡二進士二者皆以三子厚爲師」

【衡道】衡道。衡と嶽と。晉、道山亭記「二嶽横」

【衡道】五岳の中の衡山と嵩山と。蘇軾詩、勿笑一畝園、蟻垤、

【衡石】はかり、石ははかりのおもり。史、秦紀、以二一量、晝日夜有程」

【衡輪】輪は車のしん木。釋、二、

【衡】要なる官職。北史、高祖傳、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡度】はかりと、ものさしと。隋書、律歷志、累黍積籩、同二土、量與二一、無差」

【衡茅】かぶき門と、かやぶきの家と。陶潛詩「養真」下「白居易詩

「吾亦忘青雲、一足容膝」

【衡泌】隱居の地の名。詩、陳風、衡門之下、可以棲遲、泌之洋洋、可以樂飢」

【衡疑】よこぬひ、横にぬふ。縮縫の對、楳弓、古者冠縮縫、今也

【衡門】かぶきも、隱者などの家の門。詩、陳風、一之下、可二以棲遲」

【衡陽】縣の名、三國の呉の時に置く、晉は衡山と改む、其の故城は今の湖南省衡山の東北に在り

【衡山】衡山と嶽山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡巷】ちまた。晉書、張方傳「大敗、殺傷滿於二街巷」

【衡肆】ちまたの店。唐書、王世充傳

「毎、出輟、無三、驛、游、歷、行、行、者、但、止、立、二、市、肆、街、肆」

【衡道】えだみち。兩方に岐れる道。荀勗、勸學「行、二、者、不、至、事、三、兩、君、者、不、容、業、是、專、一、不、至、事、三、

ば成功せざる也」

【衡塗】わかれみち。塗は塗が葡萄子

【衡朱突】二、二、岐、路、衡、道、

【衡路】わかれみち。四方に通ずる

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【衡】衡の衡。衡山と嵩山と。王勃、滕王閣序、

【史・補補傳】衣冠。古賢像十一人、一非自非晉筆。○

【衣冠】衣冠のえりの胸にて相合ふ部分の稱。

【衣履】きものと扶持米と。元史、文宗紀、每歲發給其一二衣履、廩食。

【衣領】衣のえり。又衣服。南史、王思遠傳、特帽一、無不整潔。

【衣襟】きものと、かてと。衣服と食物と。漢書、嚴助傳、衣襟一、入二越地。

【衣鉢】鉢。○圖衣は袈裟、鉢は應器。一托鉢して施物を受けるはちなり、禪宗の始祖(達磨)が、二祖慧可に正法眼藏を授けし時、其の器として此の二品を傳へたる故事。因りて法を受けつことを衣鉢を傳ふといふ。傳燈錄、初祖達磨、奉佛衣一、束土、得道者付之、以爲眞印。至三祖大鑑、乃置其衣、而無傳焉。○轉じて廣く師の道を傳ふる義とす。陸游詩、八十到頭終強項、欲下將一付香兒上。

【傳衣鉢】師の法を傳ふる義。前條參看。

【振衣千仞岡】俗界を超越せる形容。左思詩、一濯足萬里流。

【衣至軒】軒は懸衣短くして備かに懸に至る。曹成、牛角歌、短

布單衣適至軒。衣莫如新人、衣莫如故。○衣は善とす。晏平仲の景公に語りし言(晏子春秋)。

【卒】卒(三七五三)の正字。

【叔】サイ。○えり(枉)○もすそ、すそ(裙)○膝に及ぶ衣(衣)。

【衫】サン。○ちひさく短きころも(小襦)○單衣の短きころも。○その端なきころも「汗」○ころも、單衣の通稱「青」。○「衫子」婦人の服。中華古今注、秦始皇詔宮人皆服「衫」亦曰「中衣」。

【表】ハ。○うはぎ(上衣)○上衣、ハをきる。○論、郷黨、必一而出、きせる(著)○轉じておもて、うは、ハ、そと(外面)「海」一「面」○あ

らはす(顯)明かに知らしむ。○「異書、畢命、一厥宅里、○こす(妙)○しるす(識)○しるし、めじるし(標的、標準)○のり、みち、○すぐれたるやうす「儀」○「異」○たちる(舉止)○ひかればしらす、時を計るために目をもちし柱。史、司馬穰苴傳、立一漏、○とけい(時計)俗に鏡に作る。○君主又は官府に奉る書。章奏の類。「箋」賀「謝」上「辭」出師「陳情」文體明辯「者標也、明也、標著事緒使之明白以告乎上也」○母方又は妻の方の親類、外姻「兄弟」○偉大なる相「○ぬきんでたる貌。○種種のいりくみし事物を列記して一目に見易からしむるもの「年」「統計」

「豫算」○のべしく(宣布)「白」代「衆人に代りて意見をのべ、○公然」向「○外面に取りつけるもの「聲」○「屋外」の方。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【表】ハ。○禮記の篇名、男子の冠の條を見よ。

【袂】(ト) 一説に平聲とす。通す。一説に平聲とす。【袷】(ト) したき(袷衣)廣袖(袷)一也。【袷】(ト) 中心を開き導きて善を爲さしむ。左、傳二八「今天誘其衷」使(皆)降心以相從也。【袷】(ト) 中正の道によりて裁断する。折衷。【折衷】(ト) 中正にかなふやうに裁断する。史、孔子世家「ニー子夫子」折衷、裁衷。【袷】(ト) きこみ、衣の下に甲を著る。左、襄二七「楚人一ノ」注「甲在二衣中」。【衷懷】(ト) こころ。二衷心・衷情。【衷懷】(ト) まごころ。徐陵、論「和親」書「希篤親隣、敬開二一」衷誠、誠款。【衷懷】(ト) 心中のまごころ、蔡襄賦「匪二一之雅尚」中懷。【衷心】(ト) まごころ。二衷情・衷懷・衷情。

たもと。袖の下の袋の如くに垂れたる部分。轉じて袖の裏にも用ふ。論、郷黨「褌表長、短右」。【袷】(ト) たもとをふりはらひて奮ひ起つ。左、宣十四「楚子開之」。【袷】(ト) たもとをはらひて勢よく起つ。史、鄒陽傳「一而正」二投袂奮袂、揮袂。【袷】(ト) 袂と袂、袂と袂。【袷】(ト) 袂と袂、袂と袂。

蓋從色彰稱也、梵音具云迦羅沙與、此云不正色(青・黃・赤・白・黑の五正色)にあらざる義。業疏云、本作迦沙至、梁葛洪撰字苑下方添衣、言道服也。通鑑、武后賜僧法明等紫袷、二褐色衣忍辱衣、出世服。法服。【袷】(ト) 僧の遊行中、三衣の兩層に買されざる爲めに纏める袋、兩層にかけて行く。

【袷】(ト) 袷(衣部四畫)に同じ。【袷】(ト) 袷、袷、袷。【袷】(ト) 袷、袷、袷。【袷】(ト) 袷、袷、袷。

【袂】(ト) 市街の繁華なる形容、通行人の袖が連りて幕を成す。左思、魏都賦「馭賦、馭馬、一紛中」挿は幕。【袂】(ト) そでの中に入れて搦へられるほどの小形の書物。一木、巾箱本。【袂】(ト) その中の小形の書物。東軒筆録「廣九文爲相、袖中有二、小方冊、名曰、林前錄」。【袂】(ト) そでのうち、無名氏、朝元閣賦「納二煙於一、看二月於掌上」二袖中。

【袂】(ト) ふくろねずみ、香椎動物の有袋類中の肉を食ふ者、形鼠に類す、身長三寸許、全體鼠色、腹は灰白色、靴の腹部に兒を容れて育つる皮囊あり、大、一、と同じ、唯昆虫を以て食と爲して草を食はず。【袂】(ト) タン。【袂】(ト) タン。

【袂】(ト) 袂、袂、袂。【袂】(ト) 袂、袂、袂。【袂】(ト) 袂、袂、袂。

漢書、羊續傳「其資贖、惟有布衾一枚、襦數枚、而足已」。【袂】(ト) 袂、袂、袂。

【袂】(ト) 市の繁華なる形容、通行人の袖が連りて幕を成す。左思、魏都賦「馭賦、馭馬、一紛中」挿は幕。【袂】(ト) そでの中に入れて搦へられるほどの小形の書物。一木、巾箱本。【袂】(ト) その中の小形の書物。東軒筆録「廣九文爲相、袖中有二、小方冊、名曰、林前錄」。【袂】(ト) そでのうち、無名氏、朝元閣賦「納二煙於一、看二月於掌上」二袖中。

【袂】(ト) ふくろねずみ、香椎動物の有袋類中の肉を食ふ者、形鼠に類す、身長三寸許、全體鼠色、腹は灰白色、靴の腹部に兒を容れて育つる皮囊あり、大、一、と同じ、唯昆虫を以て食と爲して草を食はず。【袂】(ト) タン。【袂】(ト) タン。

【袂】(ト) 袂、袂、袂。【袂】(ト) 袂、袂、袂。【袂】(ト) 袂、袂、袂。

漢書、羊續傳「其資贖、惟有布衾一枚、襦數枚、而足已」。【袂】(ト) 袂、袂、袂。

【袂】(ト) 市の繁華なる形容、通行人の袖が連りて幕を成す。左思、魏都賦「馭賦、馭馬、一紛中」挿は幕。【袂】(ト) そでの中に入れて搦へられるほどの小形の書物。一木、巾箱本。【袂】(ト) その中の小形の書物。東軒筆録「廣九文爲相、袖中有二、小方冊、名曰、林前錄」。【袂】(ト) そでのうち、無名氏、朝元閣賦「納二煙於一、看二月於掌上」二袖中。

【袂】(ト) ふくろねずみ、香椎動物の有袋類中の肉を食ふ者、形鼠に類す、身長三寸許、全體鼠色、腹は灰白色、靴の腹部に兒を容れて育つる皮囊あり、大、一、と同じ、唯昆虫を以て食と爲して草を食はず。【袂】(ト) タン。【袂】(ト) タン。

【袂】(ト) 袂、袂、袂。【袂】(ト) 袂、袂、袂。【袂】(ト) 袂、袂、袂。

漢書、羊續傳「其資贖、惟有布衾一枚、襦數枚、而足已」。【袂】(ト) 袂、袂、袂。

【袂】(ト) 市の繁華なる形容、通行人の袖が連りて幕を成す。左思、魏都賦「馭賦、馭馬、一紛中」挿は幕。【袂】(ト) そでの中に入れて搦へられるほどの小形の書物。一木、巾箱本。【袂】(ト) その中の小形の書物。東軒筆録「廣九文爲相、袖中有二、小方冊、名曰、林前錄」。【袂】(ト) そでのうち、無名氏、朝元閣賦「納二煙於一、看二月於掌上」二袖中。

【袂】(ト) ふくろねずみ、香椎動物の有袋類中の肉を食ふ者、形鼠に類す、身長三寸許、全體鼠色、腹は灰白色、靴の腹部に兒を容れて育つる皮囊あり、大、一、と同じ、唯昆虫を以て食と爲して草を食はず。【袂】(ト) タン。【袂】(ト) タン。

【袂】(ト) 袂、袂、袂。【袂】(ト) 袂、袂、袂。【袂】(ト) 袂、袂、袂。

漢書、羊續傳「其資贖、惟有布衾一枚、襦數枚、而足已」。【袂】(ト) 袂、袂、袂。

【袂】(ト) 市の繁華なる形容、通行人の袖が連りて幕を成す。左思、魏都賦「馭賦、馭馬、一紛中」挿は幕。【袂】(ト) そでの中に入れて搦へられるほどの小形の書物。一木、巾箱本。【袂】(ト) その中の小形の書物。東軒筆録「廣九文爲相、袖中有二、小方冊、名曰、林前錄」。【袂】(ト) そでのうち、無名氏、朝元閣賦「納二煙於一、看二月於掌上」二袖中。

【袂】(ト) ふくろねずみ、香椎動物の有袋類中の肉を食ふ者、形鼠に類す、身長三寸許、全體鼠色、腹は灰白色、靴の腹部に兒を容れて育つる皮囊あり、大、一、と同じ、唯昆虫を以て食と爲して草を食はず。【袂】(ト) タン。【袂】(ト) タン。

【袂】(ト) 袂、袂、袂。【袂】(ト) 袂、袂、袂。【袂】(ト) 袂、袂、袂。

漢書、羊續傳「其資贖、惟有布衾一枚、襦數枚、而足已」。【袂】(ト) 袂、袂、袂。

【袂】(ト) 市の繁華なる形容、通行人の袖が連りて幕を成す。左思、魏都賦「馭賦、馭馬、一紛中」挿は幕。【袂】(ト) そでの中に入れて搦へられるほどの小形の書物。一木、巾箱本。【袂】(ト) その中の小形の書物。東軒筆録「廣九文爲相、袖中有二、小方冊、名曰、林前錄」。【袂】(ト) そでのうち、無名氏、朝元閣賦「納二煙於一、看二月於掌上」二袖中。

【袂】(ト) ふくろねずみ、香椎動物の有袋類中の肉を食ふ者、形鼠に類す、身長三寸許、全體鼠色、腹は灰白色、靴の腹部に兒を容れて育つる皮囊あり、大、一、と同じ、唯昆虫を以て食と爲して草を食はず。【袂】(ト) タン。【袂】(ト) タン。

【袂】(ト) 袂、袂、袂。【袂】(ト) 袂、袂、袂。【袂】(ト) 袂、袂、袂。

漢書、羊續傳「其資贖、惟有布衾一枚、襦數枚、而足已」。【袂】(ト) 袂、袂、袂。

とせしもの。後漢書、輿服志「爲袴、以表貴賤」帕、襦。○國、中古、婦人のしたき。一説に、相字の誤用。

【袷】

○おび、衣を束ぬる所以のもの。○はらおび。隋煬帝詩「錦袖淮南舞、寶一楚宮腰」たび(足衣)襦。○さはん(脚衣)

【被】

○おほふ(覆)楚辭「皋蘭」徑兮。○およぶ(及)書、禹貢「西」于流沙。○おもて(表)○くは(加)史、高祖紀「高祖」酒○さる(著)服。○おぶ(帶)○かぶる、かうむる、頭にいたたく、うける(受)「一思」「禍」○かうむらす。○る、受身の助字。○おふ。後漢書、賈充傳「羽先登」おはす(負)○ひらく、披に通ず。○ひらひらとする貌。○婦人のかみかさり(首飾)詩、召南「之」儻儻。○ふすま、ふとん、よぎ(衣)ねまき(寝衣)

也と註し、被むる義、それを助辭に用ひて、らると訓む、被は知ること、被むるなり、管仲連傳に「以三萬乘之國、被國於趙」とあり、時には多く被の字を用ふ。○見は見らるるの義にて、らると訓む、被よりは軽し、見三輕侮は、人に侮らるるを見るなり、多く現在に用ふ。左傳「隨之見伐、不量力也」○所はらると訓む、はしよの義より轉用す、所三親厚は、人の親厚する所たるなり。

【被衣】

○衣をきる。○堯の時の高士の名。高士傳「許由之師、曰三高」三、高之師、曰三王倪、王倪之師曰三「一」三、知北遊、高士問「道乎」三。○他人に害せられる。加害の對。損害をかうむる。

【被褥】

○他人の著る毛布の粗衣を著る。老子「知我者希、則我貴矣、是以聖人、一儉、一玉、世人の知るを求めず」

【被衾】

○其の官廳に附屬する役所。又其の役人。

【被衾】

○堅き甲冑を著る。戰國策「吾一、一、銳、越、三、強、敵、而、死、此、猶、一、卒、也、銳、は、銳、兵」

【襦】

○みごろ(襦)衣身。○しとね、しきもの(重席)褥の上にくくもの。○固、蓆子。蓆、細に通ず。

【袷】

○推(衣部五畫)に同じ。

【袷】

○あはせ(複衣)表裏二枚の布を合せ縫ひしきもの。玉簪衣無絮也。一、袷復衣夾衣。○衣の縫目、一説にえり(袷)○えり(衣領)曲禮「天子視不上于」(天子に拜調するには御衣の襟より上の方を見ざるやうにする)

【袷】

○うちかけ、婦人のうはぎ、しかけ(襦)後漢書、皇后紀「裳鮮明」一、袷。○もすそ(衣裾)

賀傳「石虎雖以謹得終、然數一」一、遇、謹。

【被褥】

○みをはきる。淮南子「若一」一、而、救、火、毀、潰、而、止、水」

【被褥】

○みをはきる。淮南子「若一」一、而、救、火、毀、潰、而、止、水」

【被褥】

○みをはきる。淮南子「若一」一、而、救、火、毀、潰、而、止、水」

【被褥】

○みをはきる。淮南子「若一」一、而、救、火、毀、潰、而、止、水」

【裁】

○たつ、さく(裂)衣服をしたてる爲めに布帛をたちきる

【裁】

○たつ、さく(裂)衣服をしたてる爲めに布帛をたちきる

【裁】

○たつ、さく(裂)衣服をしたてる爲めに布帛をたちきる

【裁】

○たつ、さく(裂)衣服をしたてる爲めに布帛をたちきる

【裁】

○たつ、さく(裂)衣服をしたてる爲めに布帛をたちきる

ず、ひだりまへに衣を著る、夷狄の風俗。論、憲問「微三管仲、吾其一」

【被褥】

○みをはきる。淮南子「若一」一、而、救、火、毀、潰、而、止、水」

【被褥】

○みをはきる。淮南子「若一」一、而、救、火、毀、潰、而、止、水」

【被褥】

○みをはきる。淮南子「若一」一、而、救、火、毀、潰、而、止、水」

【被褥】

○みをはきる。淮南子「若一」一、而、救、火、毀、潰、而、止、水」

【被褥】

○みをはきる。淮南子「若一」一、而、救、火、毀、潰、而、止、水」

【被褥】

○みをはきる。淮南子「若一」一、而、救、火、毀、潰、而、止、水」

【被褥】

○みをはきる。淮南子「若一」一、而、救、火、毀、潰、而、止、水」

【被褥】

○みをはきる。淮南子「若一」一、而、救、火、毀、潰、而、止、水」

【被褥】

○みをはきる。淮南子「若一」一、而、救、火、毀、潰、而、止、水」

【裝束】ツヤツヤ ○旅行のしたく。北史、李暹傳、至夜勒所部云、陳悅欲向三秦州、命皆一、○みじたくする。李白詩、渾成一皆綺羅。

【裝束】ツヤツヤ 衣物をかざる。李暹山雜纂。

【裝束】ツヤツヤ 書物をとじてしたてる。裝束ツヤツヤ 銃丸をこめる。裝束ツヤツヤ 彈藥をこめる。

【襦】ジュ ○やぶれたる短き布の衣(敝衣)史、秦紀「寒者利」襦。注「一作短、小襦也」○豎カサの衣の布の長襦。

【襦】ジュ 不完ツヤツヤ やぶれたるもが完からざる程貧し、襦は賤人の服する粗き毛布の衣。漢書、賈馮傳「妻子糠豆不贖」。襦ジュ 妻。

【袷】セイ ○死者に贈る衣被。漢書、鮑宣傳「以衣衾」○日月已に過ぎて後、喪を閉きて忌服する。○はだか(裸體保身)○はだかになる。孟、公孫丑「袒裼裸於我側」。

【袷】セイ 不完ツヤツヤ やぶれたるもが完からざる程貧し、襦は賤人の服する粗き毛布の衣。漢書、賈馮傳「妻子糠豆不贖」。襦ジュ 妻。

【裋】シ ○たをやか。○扇。○しなやか。柔ヤ、かく美くし。○美ミ、華ハ、くまやかなる貌。王逢詩「芙蓉一華」。○扇シ、宛轉クマ。○風フ、木を揺かす貌。謝靈運詩、白楊信シ、○聲シ、つづきて絶えざる貌。杜甫詩、猿啼シ、○啼シ、虚壁シ、○しなやかに縊つたる貌。徐伯陽詩、圓籠シ、掛シ、青絲シ。

【補】ホ ○おぎなふ、おぎなひ、つくりあつたり、衣服のほころびを縫ひて完くす。説文「完衣也」○轉じてすべて物の破れたるを修めなほす。急就篇、註「修破謂之」。○たすく(助)○ます(益)裨益する。○物のかけたる所を足す。うめあはす。孟、梁惠王「不足」○官職に叙する「任」○つぎなほす。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

【補】ホ 不完ツヤツヤ あぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不用之禾、調腸」。

